

伊勢茶発祥の地

川か俣ばた谷だにのお茶

高瀬孝二編著



かばただに
川俣谷とは、
檜田川上流部の松
阪市飯南町・飯高町
の地域をいう



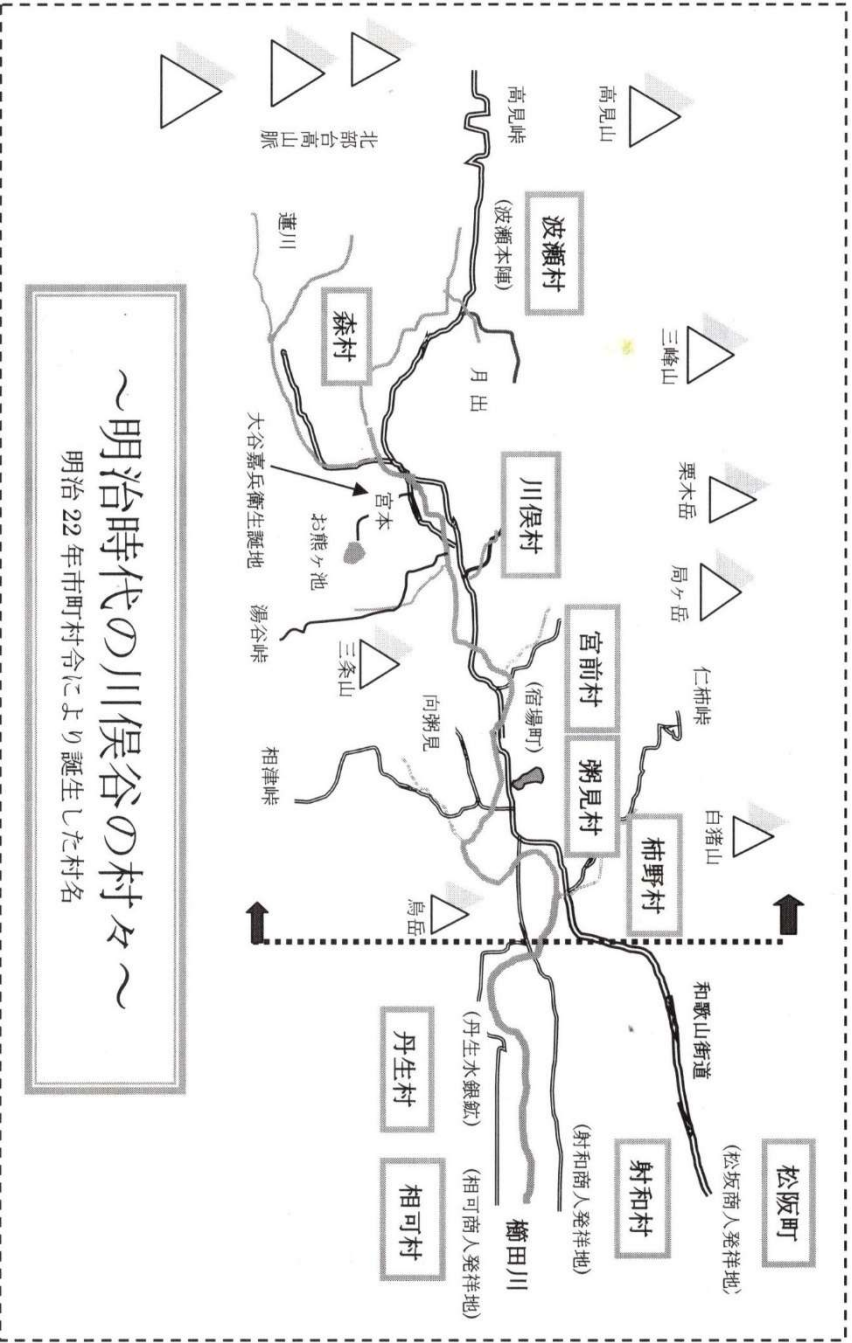
川俣谷の茶園



良く管理された飯高町赤桶付近の茶園



飯南町粥見の集団茶園



松阪町

(松坂商人発祥地)

和歌山街道

射和村

(射和商人発祥地)

榎田川

(丹生水銀鉱) (相可商人発祥地)

丹生村

相可村

白猪山

柿野村

宮前村

川俣村

向粥見

相津峠

三條山

湯谷峠

森村

宮本

お熊ヶ池

大谷嘉兵衛生誕地

蓮川

高見峠

高見山

～明治時代の川俣谷の村々～

明治22年市町村令により誕生した村名

目次

はじめに

この小誌を読んでいたぐにあたって

(一) 川俣谷及び川俣谷茶について

(二) お茶の銘柄について

(三) 伊勢商人について

一 川俣谷は伊勢茶発祥の地

室町時代の書「背書国誌」の記述

二 室町時代、伊勢国の寺院から京都御所(朝廷)に

お茶が盛んに献上されていた

京都御所「お湯殿の上の日記」の記述

三 江戸時代、既に川俣谷はお茶の大産地であった

当時のお茶は主に山に植えられ「茶山」と呼ばれていた

四 江戸初期、伊勢茶は伊勢商人の手で江戸をはじめ、

出羽秋田まで販売されていた

25

(一) 当時、活躍した伊勢商人

(二) 「蔵焼失の覚」文書

(三) 茅広江の茶灯電

(四) 江戸初期に射和、相可商人は、なぜ出羽秋田・酒田と交易があったのか

五 将軍徳川吉宗も川俣谷茶を飲んでいた

↳ 将軍吉宗公に川俣谷茶を献上、一躍有名になった

38

六 伊勢神宮御師の土産物として川俣谷茶が使われた

40

七 粥見村茶業の勃興

↳ 氷田善次郎の功績

44

八 江戸時代の伊勢茶流通経路

(一) 敦賀経由、出羽秋田・酒田送り

48

- 九 安政六年、最初の日本茶輸出は、殆どが伊勢茶であった
- (二) 信濃路（中山道）経由の江戸送り
 - (三) 海上輸送（船運）による江戸送り
 - (四) 山城宇治・大坂送り

- (一) 横浜港からの輸出
- (二) 四日市港からの輸出
- (三) 川俣谷茶の輸出で活躍した先人

十 川俣谷茶業、苦難の時期

く伊勢茶の名声が消え去ったく

十一 戦後の川俣谷茶業の復活

- (一) 深蒸し茶の普及
- (二) 戦後、川俣谷茶業の復活に尽力した先人

十二 川俣谷探訪

く川俣谷を一度訪ねてみようく見どころ一杯く

付録

- (一) 大谷嘉兵衛翁顕彰事業（胸像建立）記録
- (二) 三重縣飯高飯野郡茶業組合規約

111 102

トピックス

三重県生まれの幻の手もみ製茶法「片手葉揃揉み」の再現

124

参考文献

129

はじめに

著者は昭和十一年（一九三六）現在の松阪市飯南町向粥見の茶農家の次男として生れました。生家は昔から製茶業を営み、子どもころは茶部屋と称する製茶工場には十台余の焙炉（手もみ製茶台）が並び、茶の季節になると茶師（手もみ技術者）が弟子を連れ泊まり込みで製茶に従事していました。また、志摩方面から多勢の茶摘み女性が来て競って茶芽を摘んでいたことを今でも鮮明に覚えています。明治十七年生まれの祖母からは、私の曾祖父に当たる藤八が明治のはじめ、神戸に製茶売込所を設け、外人商社相手に川俣谷茶を売り込んだ話を何度も聞かされました。

十年ほど前、築後百四十年ほど経った生家を解体したとき、仏間の天井裏から当時の製茶売込所の看板が発見され、神戸の外人居留地近くに小さな茶士元込の店を出していたことが裏付けられました。

この様な環境の中で育った私は子どもころから茶業に馴染み、県の茶業試験場長に就いていた叔父に憧れ県に就職し、叔父の職歴を辿ることになりますが、平成二十一年に私の茶業に関わった半世紀の集大成として「三重県茶業史」を編纂発刊した際に故郷川俣谷のお茶についての資料を多少蒐集したので、ここに「川俣谷のお茶」として編纂した次第であります。

なお、歴史に素養もなく、益してや文筆家でもない私が蒐集した資料をただ羅列しただけの

もので、専門家から見ればおかしいところが多くあると思いますが、長い間、茶業に携わってきた者として、伊勢茶発祥の地と伝えられる川俣谷のお茶の歴史を少しでも知ってほしいとの思いで纏めました。拙文お許し頂き、お目を通していただければ幸いです。

平成二十八年二月 著者

—この小誌を読んでいただくにあたって—

一、川俣谷及び川俣谷茶について

「南勢雑記」には、川俣谷とは、柏野より下滝野、宮の前、赤桶、田引、乙栗栖、七日市、波瀬までの七里、川に添いければ川俣谷と名付く。此川下を櫛田川という川とあり、現在の松阪市飯高町を指していますが、本誌では下流隣接の飯南町以西の櫛田川上流地域を「川俣谷」とし、この流域で産する茶を称して「川俣谷茶」とさせていただきました。

さて、川俣谷は三重県中部の山間部に位置し、周囲には千二百メートル級の山々が連なる明光風靡にして気候温暖な地域で、山狭を流れる櫛田川は三重県松阪市飯高町と奈良県東吉野村を境とする北部台高山脈を分水嶺とし伊勢湾に注ぐ延長八七キロメートルの清流河川で、この地域は古くは大和興福寺や春日社の庄園として、また、南朝北畠家の支配時代を経て元和五年（一六一九年）に紀州藩領となりました。この地域は、早くは大和から伊勢神宮に通ず

る伊勢路なる古道が拓け、江戸時代になると紀州公（和歌山藩主）の参勤交代の和歌山街道として整備され、要所に本陣を置き宿場町として往来も盛んでありました。

川俣谷にお茶が伝えられたのは、おおよそ八百年前の鎌倉時代初期とされ、伊勢茶発祥の地とされています。当時の茶園は「茶山」と云って狭隘な傾斜地にへばりつく様に植えられていましたが、川俣谷川の清水と温暖且つ山間特有の昼夜の温度格差が銘茶を生み、江戸時代には、この地域で産する茶は、伊勢国の茶「伊勢茶」として伊勢商人の手で江戸をはじめ、東北、北陸地方まで販売され、また、伊勢神宮御師の手土産として使われたとも云われています。現在においても良質茶を産出する伊勢茶の中核的産地であります。

二、お茶の銘柄について

（伊勢茶は三重県産茶のブランド名、松阪茶のルーツは川俣谷茶）

お茶の銘柄には、産地銘柄と流通銘柄があります。産地銘柄は生産地名（例えば松阪茶、大台茶、わたらい茶、亀山茶、鈴鹿茶、水沢茶など）を付けることが多く、流通銘柄は県名（静岡茶、鹿児島茶、宮崎茶など）や江戸時代の国名（伊勢茶、宇治茶、近江茶、大和茶など）を付ける所謂、その府県の統一した茶のブランド名です。江戸時代の国名を付けている産地は古い歴史あるお茶の産地とも云えます。

江戸時代における川俣谷茶は産地銘柄で、概して橿田川流域で産する茶、また、伊勢茶は流通銘柄で橿田川、宮川流域で産する茶、雲出川上流部で紀州藩松坂領域のお茶で、主に伊勢商人が扱ったお茶を伊勢茶と云っていた様です。本誌では川俣谷茶・伊勢茶が随所で出てきますが、「川俣谷茶」伊勢茶」と思ってください。

（江戸時代の流通銘柄）

「橿田川流域の茶（産地銘柄）川俣谷茶」

○伊勢茶十宮川流域の茶（産地銘柄北不詳）

「雲出川流域で紀州藩松坂領域の茶（産地銘柄日川上茶？・多気茶？・）」

（産地銘柄の変遷）

「川俣茶―香肌茶」

○川俣谷茶―
下松阪茶

「粥見茶―飯南茶」

※現在の伊勢茶は、三重県内で生産され、一定の栽培・流通条件（伊勢茶ガイドライン）に適合し茶。（産地銘柄れ水沢茶、鈴鹿茶、亀山茶、松阪茶、大台茶、わたらい茶など）

三、伊勢商人について

伊勢商人とは、古くは橿田川中流域の丹生（現在の多気町丹生地区）に産する水銀（丹生水銀）を原料に、葉や伊勢白粉などに商品化し財を成した商人（射和商人及び相可商人）と蒲生氏郷の松坂開府に伴い派生した商人（松坂町商人）を中心に近隣の津、山田（伊勢）などの有力商人を加え、主に江戸を中心に活躍した商人集団を伊勢商人と云います。彼らは木綿や呉服、茶などの産物を以て江戸に進出し、江戸を拠点に東北地方まで商圏を広め、大阪商人、近江商人と並んで日本三大商人と云われていました。中でも三井家、長谷川家、小津家、国分家などは、現在においても有数の企業体として手広く商売を続けています。

松坂商人を語る会々長の大喜多甫文氏は著書「松坂商人のすべて（一）」で伊勢商人について、次の様に整理されています。

「橿田川グループ（射和・相可商人）
「松坂商人」

伊勢商人一 「松坂町グループ（松坂町商人）」

「津・その他グループ」

（ ）内は編者挿入

〈室町時代の書「背書国誌」などの記述〉

川俣谷にお茶が伝えられたのは、おおよそ八百年前の鎌倉時代初期と云われている。室町時代に書かれた「背書国誌」には、京都高山寺の明恵上人は栄西禅師が宋国（中国）から持ち帰った茶の実を貰い受け、梅尾に茶園を造り、山城宇治、伊賀八鳥、伊勢川上、近江高嶋に分植する。とある。栄西禅師が宋国から帰朝したのは建久二年（一一九一年）であることから伊勢川上に茶を伝えたのは、その茶園から茶実を採り近隣の諸国に普及したと考えると、一一一〇年前後の鎌倉時代初期と考えられ、これを以て伊勢茶の起源としている。

それでは、明恵上人が茶を分植したと云う伊勢川上とはどこか。多くの文献には、雲出川上流の川上村（津市美杉町川上）から櫛田川上流の川俣谷（松阪市飯高町）一帯と記述し、その場所は特定していない。昭和三十一年に三重大学中野清作・松田延一の両教授が古老からの聞き取り調査でも特定に至らず、最近では民族学者で茶業研究家でも知られる松下智氏と著者が当地域の寺院の調査を継続しているが成果は得られていない。いずれにしても江戸時代には川俣谷一帯は銘茶の産地として茶業が盛んであったことには間違いはなく、川俣谷が伊勢茶発祥の地とする説には一定の説得力がある。

以下、伊勢茶発祥地説を裏付ける文献等の記述（要約）を紹介する。

「背書国誌」

室町時代に書かれたと云われる「背書国誌」には、明恵上人は栄西禪師から贈られた茶実を京都梅尾に播種し、之を山城宇治、近江高嶋、伊賀八鳥、伊勢川上に分植する”とある。

「異庭訓往来」

室町時代の書「異庭訓往来」にも「背書国誌」と同様の記述がある。さらに同書には銘茶産地として京都梅尾、山城宇治、伊賀八鳥、伊勢河合を挙げており、伊勢河合は旧一志郡川合村ではないかとの説がある。

なお、三重県茶業概観（昭和二七年刊）の執筆者若林亨は「異庭訓往来」の記述と真盛上人（慈摂大師）の関連について次の様に推察している。「真盛上人は文明十一年（一四七九）一志郡大迎村（現津市一志町川合）に生まれ、足利義政の信仰を得て近江坂本に西教寺、伊賀に西連寺、伊勢に成願寺を建立しているが、真盛上人の足跡と当時の茶産地が合致していることから真盛上人は、茶を仏教布教の一具として普及伝導し、そうして設けた寺院の茶園が天下の銘園として宣伝されたと推察し、そして「異庭訓往来」記述の伊勢河合の銘茶は真盛上人の生

誕地近くの寺院の茶ではないか」

また「日本歴史（読売新聞社版）には室町時代の銘茶園として伊勢小山寺（現松阪市の神山一乗寺）、丹波神尾寺、山城仁和寺・醍醐寺、近江石山寺ほかの寺院名を挙げていることから察すると、当時の茶の栽培は一般民衆より僧侶などが主で、封建支配下において農民は作物を選定する自由がなく、特権階級の寺領や庄園・荘園で主に栽培していた。なお、農民が自由に茶栽培を出来るようになったのは天正十六年（一五八八）年の刀狩令（兵農分離策）以降であると考えられる。（なお書きは著者加筆）

「勢陽俚諺」

〃明帝の時、宗帝より茶の実を贈る。建仁寺栄西禅師が茶の実を持来たりという。又、其後梅尾明恵上人に贈りつつ梅尾に植え、又、宇治に遷し、又、伊勢川上に植し、又、江州高嶋にも植され初めなり”の記述がある。

「勢陽雜記」

〃前茶は川上、多気谷、河俣辺の山中に要す”

註 川上、多気谷とは、津市美杉町川上及び多気地域、河俣辺は現松阪市飯高町川俣谷一

帯を指す。

「日本茶業史」(大正三年一九一四年)

伊勢国の欄に、伊勢は東南海に臨み、西北山を負ひ、風光明媚の古国にして、其土質は甚だ多く茶樹の栽培に適す。背書国誌に榮西禪師より茶実を齎し、之を梅尾の明恵上人に伝ふ。上人乃ち山城国梅尾、宇治、近江国高島、伊勢国川上に分植すとあり、是れ今の川俣茶の濫觴なり、聞く川俣はもと香烟と書き茶の香味を称せるより起れりと、彼の波瀬、月出、仁柿の如き、特に茶実を播下するの要なく、山間の衆木を伐採し雑草を艾除するときは、自から好箇の茶園と化し了すと伝ふ。蓋し川上は雲津川の上流、香烟は樹田川の上流を指示するなるべし^三と記述している。

註一 三重県史においても日本茶業史の記述を引用している。

註二 明恵上人が茶を分植した伊勢川上は、雲出川上流部、樹田川上流部附近とし、伊勢茶の始まりは川俣谷であることを示唆している。ただし、当時は、現在の様な茶園として肥培管理することなく、山間の樹木を伐採し雑草を除けば立派な茶園となつたと云っているが、恐らく更に遡る時代には山地一帯に茶実が播かれたとも考えられる。

註三 茶樹は一二〇〇年程前大陸(唐国)から渡来したと伝えられているが、当時の唐では茶の栽培は主に山地民族が栽培していたので山の樹木という觀念が強く、日本でも江戸

後期までは主に山の傾斜に植えられ「茶山」と呼ばれていた。今日の様に平地に栽培し「茶園」と呼ばれるようになったのは明治以降である。

「三重県の茶業」(大正九年一九一九年)

本県茶の起源は年代元より古く、之を植ゑ、之を煮ることを教えたるは何時の頃なるや確ならず、古書に記するところは、後鳥羽天皇の御宇文治三年四月、臨済の僧栄西禪師なる者ありて、宋に留学し、同建久二年江南の地より茶子を携へ歸りて、之を筑前国背振山に播下し、其後禪師は「喫茶養生記」を著し、喫茶の風を天下に伝ふ。其の頃柵尾の僧高弁(明恵上人)なるもの京都の建仁寺に至り榮西より、其の種子を得て之を深瀬に播植し、後ち山城菟道に移し次で仁和寺醍醐、葉室、般若寺、神尾に及し、又次で大和の実尾、伊賀の八鳥、伊勢の川上、駿河の国清見、武蔵の川越等の地に植ゑ夫れより各国に茶園を見るに至れりと伝ふ。又川上とは櫛田川の上流にして今の一志郡川上及び飯南郡川俣村附近を謂ふ、川俣は往時番畑と称へたりしを以て銘茶園たるを知るを得べく、所謂川俣茶の濫觴也。

同書「著名産地」欄の記述には、南伊勢、一志郡八幡村川上は、背書国誌にも記せる所謂伊勢の川上にして茶園の古きこと全県に比類なく、全村殆んど茶園を以て覆はれつ、あり、春の茶時此方面に入込む茶摘女は二千人を超ゆると伝たへ、古へ僧高弁が一枝を植ゑ。忽ちにして十数カ村に美麗なる茶園を見るに至りしは蓋し地味の茶樹に適するものにて、下之川村、太

郎生村、宇氣郷村、多氣村地方は今尚ほ品質優良なるもの多く、南伊勢に於ける製茶の本場となり、次に飯南郡川俣村、粥見村は即ち川俣谷茶の産地にして、茶園の歴史も亦古く、南勢屈指の原産地たり、波瀬村は月出、桑原の名園のあるところ、柿野村は往古の仁柿の地にして共に玉露園多し云々あり、この記述からも明恵上人が茶実を播いた伊勢川上は何処か特定出来ないものの、既に室町時代には、雲出川上部から櫛田川上流域は一帶には茶が栽培され銘茶産地として知られていたことが伺われる。

なお、明恵上人が茶を分植したとする伊勢川上には諸説があり、多氣郡多氣町牧泉寺の古文書から、現多氣郡大台町栃原にあった五百羅漢寺（廃寺）とする説、現四日市市水沢町の飯盛山淨林寺伝記から宮妻峽谷とする説などがあるが、その後の茶産地形成の経過から、雲出川上流部く櫛田川上流部一帯とする説を有力説としている。

「著者推察」

「背書国誌」記述の明恵上人が茶を伝えた「伊勢川上」について、蒐集した資料等から乱暴な推察を加えると、恐らく雲出川上流部の一志郡川上村近辺の寺院ではなかるうか。この地域は都と伊勢を結ぶ本街道筋にあり、北畠家の本拠地でもある多氣（北畠神社）に近く、当時、都との交流は盛んであった。また、その後の茶産地の消長をみても十分根拠があると思う。

雲出川上流部に伝わった茶は、峠越えの櫛田川上流部の川俣谷に伝播し、江戸初期に至って

紀州藩の保護と橿田川下流の伊勢商人（射和・相可商人）の手で「伊勢茶」として全国に販売されたことから、川俣谷に一大茶産地が形成されたのが実態ではなからうか。

二 室町時代、伊勢国の寺院から京都御所（朝廷）に

お茶が盛んに献上されていた

（京都御所「お湯殿の上の日記」の記述）

「お湯殿の上の日記」に室町時代の文明・文禄年間（一四六八～一五八六）に伊勢国の寺院から盛んにお茶を京都御所（朝廷）に献上していた記述がある。

「お湯殿の上の日記」とは、京都御所の天子（天皇）常住の御殿の中に「御殿の上」と呼ぶ間があり、そこに勤務する女官が、その日の出来事などを記した日記のことで、記述の一部を紹介する。

○龍光寺（鈴鹿市神戸）

・大永七年（一五二七）四月十三日いせのれう光寺（龍光寺）より、いつもの御ちやまいる。

・弘治二年（一五五六）四月九日いせのれう光寺（龍光寺）より、ととしの御ちや三十た

いまいる。

以下、大永七年（一五二七）～天正九年（一五八一）の間に二七回、茶献上の記述有り。

○円（延）応寺（津市河芸町西千里現廃寺）

・文明十八年（一四八六）十月九日いせのゑんおう寺より、いつもの御ちや五十、御はらいの箱まいる。

以下、文明一八年（一四八六）～天正三年（一五七五）の間に一九回、茶献上の記述有り。

○観音寺（現鈴鹿市寺家通称『子安観音』）

文明一五年（一四八三）～天正九年（一五八一）の間に四回、茶献上の記述有り。

○新（神）福寺（龜山市関町加太市場）

弘治二年（一五五六）四月八日茶二十袋献上の記述有り。

○六大院（津市大里窪田町）

文明一六年（一四八四）～天正八年（一五八〇）の間に七回、茶献上の記述有り。

○無量寿院（津市一身田町専修寺）

天文三年（一五三六）～天九年（一五四〇）の間に六回、茶献上の記述有り。

○しちれん寺（伊勢神宮の近く、所在不詳）

享禄一年（一五二九）～天正一五年（一五八七）の間に八回、茶献上の記述有り。

○けんおう寺（不詳）

明応七年（一四九八）六月五日茶五十袋献上の記述有り。

○しおん寺（慈恩寺か、不詳）

天正七年（一五七九）四月一五日茶二十袋（箱入）、天正八年（二五八〇）六月二日茶二十袋献上の記述有り。

○せんたう寺（善導寺か、不詳）

文明九年（一四八一）九月三日茶五十袋献上の記述あり。

（著者推察）

室町時代、茶の栽培は特権階級の寺領や庄園・荘園などで主に行われ、一般農民が自由に茶栽培を出来る様になったのは、天正十六年（一五八八）の秀吉の刀狩令（兵農分離政策）以降と考えられるが、この時代、既に伊勢国の寺社では、盛んに茶が栽培されていたことになる。川俣谷も古くは大和興福寺や春日社の庄園でもあり、当時、既に銘茶産地が形成されていたと考え、京都御所（朝廷）献上茶に川俣谷のお茶も使われていたのではないか。

三 江戸時代、既に川俣谷はお茶の大産地であった

〈当時の茶は主として山に植えられ「茶山」と呼ばれていた〉

川俣谷にお茶が伝えられたのは鎌倉時代初期とされているが、当時は主に山の傾斜地に茶が植えられ、今の様に肥培管理することなく自然放任の茶樹から若芽を摘み火に焙って飲用していた。川俣谷茶隆盛の転機は元和五年（一六一九）に紀州藩松坂領となり、紀州藩の茶処として特別の保護を受け、また、櫛田川下流の射和商人・相可商人がこの地方の製茶を主要商品として扱ったことに由来する。さらに享保元年（一七一六）徳川八代将軍士₅示公に川俣谷茶を献上しことで一躍有名になった。

江戸時代の茶産地の具体的な様子を示す資料は少なく想像の域を出ないが、当時、川俣谷を中心に南伊勢地方は日本一の茶産地であったことは間違いない。

以下、飯高町郷土誌、飯南町史などの資料から当時の川俣谷茶業の様子を探ってみる。

○飯高町

川俣谷は伊勢茶発祥の地として知られ、一帯は江戸時代には県下有数の茶産地で、この地で産する製茶は伊勢茶として江戸をはじめ東北地方にまで送られていた。幕末に横浜に出て茶貿易商として成功、後に茶聖と崇められた大谷嘉兵衛の生誕地でもある。また、横浜で茶貿易商

を営んだ「伊勢屋藤兵衛」こと小倉藤兵衛も隣村の森村出身である。宮前村の堀内家の資料には、天保三年（一八三二）四月から製茶を江戸に出荷、同六年（一八三五）二月茶部屋新築する」とあり、幕末から明治にかけての荷主（産地茶問屋）は下滝野村の滝川屋吉郎右衛門、井上八郎右衛門、宮之前村の堀内利右衛門、赤桶村の角谷市兵衛、田引村の久保善兵衛、七日市村の西林宗助、田中谷蔵、森村の小倉吉右衛門の名がある。

○飯南町

江戸時代前期の寛文四年（一六六三）粥見村大指出帖に、茶小物成金三拾九両三步、銀六匁三分とある。茶小物成とは茶税のことで、飯南町史の編者が当時の換算資料を基に茶園面積を二四〇町歩と推定している。この面積は現在の飯南町の茶園面積を凌ぐものであり、当時は、現在の茶園と異なって山の傾斜地を利用した所謂「茶山」であったと考えても、江戸時代の初めに、既に広大な茶園が存在していた。飯南町史では、粥見村は川俣谷では一番耕地面積を持つ村であるが、水利確保が困難で寛文四年（一六六三）の頃の水田は、僅かに一三、三％で他は畠地であった。文化一四年（一八一七）高東池が完成し水田は大幅に増加した」と記述しているが、水利不足が茶業を発展させたとも云える。

水田が開拓された以降は、茶業は一時衰退したが、天保年間（一八三〇～一八四四）に粥見村永田善次郎が蒸製茶法（宇治製茶法）を村内に広め、品質の良好なことから茶況は回復し、また、安政年間、茶輸出が開始されるや、川俣村出身の大谷嘉兵衛や射和村の竹川竹斎ら

が川俣谷茶を積極的に買い上げたため、茶業熱は再び高まり、明治三年（一八七〇）の茶輸出量は九、五七五貫で、茶師一七名」と記さずいて、茶業の発展は多くの荷主（産地茶問屋）を生み、その中でも、戸田藤右衛門（粥見村）、高瀬藤八（向粥見村）などは横浜や神戸に出て直接売り込みを行なった。

寛文四年（一六六三）大指出帳には茶税額（茶年貢、茶小物成、茶口）について次の記述がある。

○寛文四年（一六六三）大指出帳による茶小物成（茶税額）

・深野村 茶小物成 金拾八両三步 銀 貳匁肯分七厘五毛

・横野村 茶年貢 銀六匁 茶小物成 金三両三步

・上仁柿村 茶年貢 銀百四拾貳匁四分

茶小物成 金貳両三步 銀八匁貳分貳厘五毛

・下仁柿村 茶年貢 銀拾貳匁

・粥見村 茶小物成 金三拾九両三步 銀六匁三両

○明治四年（一八六九）大指出帳 による茶小物成（茶税額）等

・深野村 産物 紙 茶 串柿

・横野村 産物 茶 串柿

・上仁柿村 産物 茶

・下仁柿村 産物 茶 茶小物成 金三匁 銀七匁专歩

・粥見村 産物 茶

茶年貢 銀八拾三久四厘

茶小物成 金三拾九匁专歩 銀七欠肯歩

・向粥見村 産物茶

茶口 金貳拾八匁三歩 銀寢匁八歩五厘

註 向粥見村は勢州田丸領多氣郡に属し、江戸時代の資料は見当たらない。

(以上、飯南町史より)

なお、明治中期の粥見村茶業の隆盛について、「伊勢茶の経済的研究昭和二九年刊行」には、次のように記述している。

「明治一五年頃、村内の山に登って見渡したところ、約二〇〇戸は茶部屋（茶加工場）を建築しているのを見た」と云う程、茶は盛んであった。また、茶どき（茶摘み時期）には茶摘み労働者が三千人位、志摩、度会の各地方から入り込んだものである。（古老の言い伝え）

以上の様に、川俣谷に端を発した茶業は、江戸時代になって下流隣接の粥見村茶業を興し、櫛田川流域から宮川流域の村々に伝播して現在の南伊勢茶業の基礎を築いた。

近隣村々の茶産地の様子

美杉町

雲出川上流域の川上村（津市美杉町川上）は「背書国誌」に記載する伊勢川上とする説が有力で、櫛田川上流域の川俣谷と並んで伊勢茶発祥の地とされている。

川上村の茶業は一時衰退するが、慶長年間（一五九六〜一六一四）に赤堀平右衛門によって再興され、江戸時代には津藩藤堂家の御領茶園として茶栽培は盛となり、同地方の茶は江戸でも川上茶として販売されたとの記録がある。

江戸時代、伊勢商人が川上茶を扱ったとの記録は今のところ見当たらない。ただ、雲出川上流部は津藤堂藩領と紀州藩松坂領が入り込んでおり、紀州藩松坂領の上多気村、竹原村、奥津



三峰山中腹の茶株、江戸時代
茶山跡か（飯高町）



白猪山山中の茶山跡（飯南町）



推定樹齢 200 年以上の茶の大樹
平成 5 年頃枯死（飯南町）

村などの茶は伊勢商人が集荷し伊勢茶として販売していた様で、雲出川上流の茶業地帯の中心地であった川上村、太郎生村、八知村、八手俣村、下多気村、下之川村、宇気郷村などの茶は津藩藤堂家の統制のもとに川上茶として販売されていた様である。なお、明治維新後は、大谷嘉兵衛ら伊勢商人が伊勢茶として販売し、多くの荷主（産地仲買人）が出現している。

三重県の茶業（大正九年発刊）には、明治時代の美杉村茶業の盛況について、「一志郡八幡村川上は、背書国誌にも記せる所謂伊勢の川上にして茶園の古きこと全県に比類なく、全村殆んど茶園を以て覆はれつ、あり、春の茶時此方面に入込む茶摘女は二千人を超ゆると伝たへ、古へ僧高弁が一枝を植ゑ。忽ちにして十数カ村に美麗なる茶園を見るに至りしは蓋し地味の茶樹に適するものにて、下之川村、太郎生村、宇気郷村、多気村地方は今尚品質優良なるもの多く、南伊勢に於ける製茶の本場となれり」と記述されている。なお、明治二〇年（一八八七）の茶統計では、一志郡の茶園面積は五六〇町歩、次いで飯高郡五〇九町歩で北勢茶産地を凌ぐ県下第一の茶業地帯であった。

大台町

文禄八年（一五九四）の検地帳に、勢州多気郡之郷柳原村小物成（茶年貢）老貫父、同じく栃原村茶年貢六斗とある。今から四百年前には既に茶はあった。大台町史の編者は、この課税額（小物成）を茶園に換算し、柳原村六反余、栃原村二反六畝としているが、恐らく現在の茶園の形態ではなく、自然放任の茶樹が山地か田畠の隅に植えられていたのではなからうか。

時代は下って、慶応二年（一八六六）の多気郡、度会郡大指帳の合計欄に、「小物成金二百五拾両三分二朱七分雑税茶年貢」とあり、この税額から推測すると、幕末には宮川流域は大きな茶産地を形成されていた。

大台町史には、安政（一八一八〜一八三〇）頃、神瀬村（現大台町神瀬）に中西惣藏なる茶商あり、多気郡下は勿論、飯南郡、度会郡の製茶を買い集め、宮川を舟で下って、大湊（現伊勢市）で千石船に積み替え江戸、横浜に送った。中西の「製茶勘定目録控（明治三年未年十二月吉旦）」に、この年、一年間で扱った金額は一万七千両余りと記述されていることから、背景には茶の大産地があったことが想像できる。

度会町

安永二年（一七七三）に於ける中川地区の大指出帳には、次の茶口（茶税）の記述があり、この額からみて、江戸後中期には相当の茶園面積を有していた。

村名	茶年貢	茶口（茶税）	戸数
麻加江村	銀四匁五分	金二一兩・銀三匁八分	五八
長原村	—	金三五兩三分・銀八匁九分二厘	百一九
坂井村	銀六匁	金四兩・銀四匁二分	四八
田口村	銀百匁	金三〇兩二分・銀四匁八分五厘	八〇
注連指村	—	金八兩一分・銀一匁一分	四五

（度会町史より）

度会地域の製茶は宮川を舟で下り、大湊（現伊勢市）で大型船に積み替えられ江戸、横浜に送られたが、宮川河口左岸の小俣、右岸の山田には、荷を扱う茶商が誕生し、双方で荷の奪い合い訴訟になったとの記述がある。

大紀町

江戸中期の元禄二年（一六九九）野尻村大指出帳に茶口金拾七両貳分、銀拾六匁貳厘、他に舟賃四百文、相可村へと記述されている。茶口額からみて、当時相当な産地があり、舟送りをしていたことが伺える。また、安永二年（一七七三）黒坂村は茶口金六両三歩の記述がある。なお、この記述からして、宮川流域のお茶も相可商人が扱っていたことになる。

北伊勢の茶産地

水沢村郷土史稿には「延喜年間（九〇一〜九二二）飯盛山浄林寺（現四日市市水沢町「一乗寺」）の住職玄庵が先代住職より空海直伝の製茶法を伝承し、当寺に播種された唐伝来の茶樹より摘採し、村人に喫茶を勧めた云々」の記述があり、これを以って、北勢地方の茶伝来としているが、その後の消長が明らかでない。

現在の北勢茶産地の始まりは、寛永年間（一六二四〜一六四三）の孤野藩主土方雄高が藩士に茶栽培を奨励しことに始まる。土方は宇治から山本勘右エ門なる茶師を招いて、当時の

製茶法であった釜炒製茶を普及させ、さらに、天文三年（一七三三）宇治湯屋谷村の永谷宗回が編み出した宇治製茶法（蒸製茶法）が注目されると、宇治から茶師を招いて宇治製茶法を普及させ、江戸中期には菰野茶として山城宇治を初め江戸でも人気を博した。

現在の北勢茶業の中心をなす水沢茶業は、水沢村常願寺住職中川教宏の茶業奨励に始まるとされている。

「水沢村郷土史稿」によると、中川教宏は「嘉永二年（一八四九）、水沢村三本松に三反歩の茶園を拓き、村人に茶の有利なことを説き、茶栽培を大いに奨励した。中川の茶栽培について、常願寺の檀家衆は、この様なことをすべきでないと反対したが、とき恰も茶貿易開始されんとする時期でもあり、次第に茶を栽培する者が出てきた。例えば、水沢村大谷松兵衛なる者は文久二年（一八六二）に「藩主土方の許しを得て原野三反歩を開墾し茶園を拓く。」との記述ある。中川教宏は今日の水沢茶業の基礎を築いた第一人者であるが、幕末の茶業熱を喚起した人物に四鄉村室山の伊藤小左衛門（四世）がある。小左衛門は、自家の山林三町歩を開墾して茶園をつくり、また、茶貿易が始まると、近隣の茶葉を買い集め製茶し、これを横浜に送って利益を得た。小左衛門の成功を見て、三重郡をはじめ、鈴鹿郡（現鈴鹿市、亀山市）、奄芸郡（現津市芸濃町など）などで茶園を作るものが続出し、明治初年

(一八六八)には鈴鹿山麓一帯に広大な茶産地が出現した。なお、北伊勢の茶は主に近江商人の手で山城宇治に送られ、宇治茶商人によって宇治茶として全国に販売された。



飯盛山浄林寺跡と云われる
宮妻峡谷山中の茶山跡
(四日市市指定史跡)
(四日市市水沢町)



同上 茶株 (推定 200 年以上)

四 江戸初期、伊勢茶は伊勢商人の手で江戸をはじめ、

出羽秋田まで販売されていた

文献や資料から江戸時代の伊勢国茶産地は南伊勢（雲出川流域、櫛田川流域、宮川流域）であったのは間違いない。中でも櫛田川上流の川俣谷や雲出川上流の川上・多気谷は最も歴史も古く、室町時代に既に茶産地が形成されていた。

元和五年（一六一九）川俣谷は紀州藩（和歌山藩）に編入されると、藩の茶処（蕃所）として、さらに茶業は旺盛となり茶生産は拡大した。

また、櫛田川中流部の丹生地域には、古くから全国有数の水銀が産出し、下流の射和・相可には、水銀商品を扱う商人集団（射和・相可商人）が派生し、富山、国分、竹川、家城、浦木（城）、西村、向井など豪商が江戸を拠点に東北地方まで商圏を拡げていた。

川俣谷茶も、これら商人の手で全国に運ばれ伊勢茶として販売されたが、江戸初期に伊勢茶を主に扱ったのは、櫛田川下流地域の射和・相可商人で、当時、出羽秋田、酒田まで伊勢茶を送っていた記述がある。

（一）当時、活躍した伊勢商人

○富山家（現松阪市射和町）

富山家は射和商人の代表格の豪商（大黒屋）で安土桃山時代には既に小田原に出て、江戸開府と共に伊勢商人の先頭を切って江戸に進出していた。

元和二年（一六一六）の「足利帳」には「江戸茶之内利之内とらせ申候」「江戸舟ちん」
「ちや売ちん」の文字が見られ、江戸との間で伊勢茶取引の様子が伺われる。

寛永十五年（一六三八）八月の「算用帳」に「外に四拾四両君分酒田にかけ候へ共先之足利入不申」とあり、取引商品の殆どは茶で合計五百三拾箇余、茶代金は小判五百四両にのぼり、在庫品の中に伊勢茶と並んで伊勢木綿が見られる。

寛文三年（一六六三）の記録に「百弍拾九両酒田五郎兵衛より請取申金也但春夏両度もめん、茶下候金銀差引して残金也」とあり、富山家は敦賀（福井県）から船便で酒田（山形県）に伊勢木綿、伊勢茶を送っていた。また、酒田から「右者酒田五郎兵衛方より敦賀へ米、大豆登せ申売次第茶買下し申筈に候」とあり、帰り船に酒田で米、大豆を積む、一種のバーター取引が行われていた。

○浦木（城）三四兵衛阿波曾村（現松阪市阿波曾町）

射和の豪商で寛永・明暦・寛文の頃（一六二四～一六七三）にかけて江戸、羽州酒田、敦

賀、大阪に商棚（出店）を構え、伊勢木綿、伊勢茶、美濃茶、鯉節や秋田米、庄内米、最上大豆などを、この当時既に為替を利用して多角的遠隔地取引を行い、交易範囲は江戸、大阪、羽州酒田、越前敦賀、美濃など数ヶ国に及んでいる。

万治三年（一六六〇）寛文九年（一六六九）十年（一六六九）一六七〇の「棚卸算用帳」によると、大阪、京都、大津の畿内で西国物産を仕入れて、敦賀より海路を利用して出羽庄内に荷物を送り、鶴岡に支店を設けて一族の者を配し、秋田方面迄小間物、生活雑貨、米、伊勢茶塩、大豆等あらゆるものを商いしている。

万治二年（一六五九）の「売上物請取」にはその年の売り上げは六三九兩三分八久四厘で、その内伊勢茶は一八三兩四六匆九分七厘で呉服に次いで第二位である。

又、寛文九年（一六六九）七月作成の「算出帳（八年分）」の中に

伊勢茶三百七拾七匆三分 丁印拾壹本

五兩三分六匆六分 ・・印拾參本

壹兩 上印貳本

×貳拾參兩肯分拾六匆六分六厘

とあり、敦賀湊を経由して出羽方面に伊勢茶が相当量販売されていた様子が伺われる。

○西村宗栄広信（現多気町相可）

相可商人の豪商（大和屋）、射和の富山家と並ぶ大富豪、「秋田藩地誌」に「大和屋三代目西村宗栄広信（一六一七～一七〇四）は、若いころ出羽秋田に下って回漕業を営み巨利を得る」とあり、その頃、射和・相可商人が出羽秋田と交易を盛んにしていた時代と一致し、伊勢茶も大和屋の主要な取引商品であったと推察できる。

○中村七兵衛（千原家）

松坂中村七兵衛家の身内の者、最上地方で活躍、元禄六年～正徳二年（一六八九～一七一二）に至る二十年間に伊勢茶を主に販売高五千二百二十二本とあり、宝暦末年まで伊勢茶を扱っていた。

○村川太兵衛

享保元年（一七二二）伊勢材木村より榎岡（村山市）に移住、当時糖岡を代表する豪商で、享保八年～元文二年の店おろし帳に伊勢茶千三百〇八本販売の記録があり、村川家は幕末には館林藩の飛び地、村山郡の「榎岡御用達衆」に任ぜられた豪商でもある。

○松坂町商人

松坂商人が江戸で扱った品物の代表的なものは木綿、呉服であるが、江戸初期においては茶も主要な産物であったことは、以下の記述が証明している。

「三重県茶業概観」に松坂商人は木綿を以て財を成したと云われているが、元禄〜宝、氷年間（一六八八〜一七一〇）の松坂商人（三井、伊豆蔵）商品の中に菜種製茶が見られ、また、「松坂権輿雑集」新町の項に「川俣谷にて製したる煎茶、関東に輸送の間屋多し、宝永七年寅年町中茶荷八七五十駄餘」と記され、松坂新町周辺には茶問屋が集まり、櫛田川、宮川流域の製茶を集荷し江戸や山城宇治に送っていた。中でも村田家は茶を扱う商人の中でも群を抜き豪商の一人に数えられている。

○小倉藤兵衛（現松阪市飯高町森出身）

飯高郡森村の小倉家は惟喬親王に信頼を得た「小掠中納言實秀」を先祖に持ち川俣谷の木地師の総師を務める名家で代々吉右衛門を名乗っている。藤兵衛は小倉家舎弟で、早くから江戸で製茶問屋伊勢屋を営み手広く商売をしていたが、安政六年（一八五九）茶貿易が始まると横浜に移り、茶売込商として外国商社に茶を売り込んでいた。

註 後述の大谷嘉兵衛は小倉家とは親戚関係にあり、藤兵衛を頼って十九歳のとき横浜に出て茶貿易で大成したことから小倉藤兵衛は大谷嘉兵衛の育ての親と云える。

○堀内広域（現松阪市飯高町宮前）

飯高郡宮前村の堀内家は代々酒造業を基盤に、味噌、たまり、油、荒物などを手広く商う地主で、広域は寛政六年（一七九四）生まれで、家業を継ぎながら、二五歳の時、茶業の有利性に目をつけ、茶部屋（製茶工場）と荷部谷（荷捌所）を立て、自家の製茶のほか、近隣の川俣谷茶を買い集め、江戸送りを盛んにし、何度となく江戸に滞在し川俣谷茶を売り込んでいる。川俣谷茶は品質が良いことから江戸で人気を博し、茶業経営は順調であった。

註一 広域は安政三年（一八五九）六三歳で没しているが、その子、千稲は文久二年（一八六一）三一歳の時に代々の酒造業を廃業し、茶業に専念している。

註二 堀内家が茶業を廃業したのは、何時は明らかではないが、明治十一年（一八七八）に開催された三重県内物博覧会の製茶の部の優秀賞に堀内利右エ門の名があることから見て、明治の中頃までは製茶業を営んでいた。

註三 広域は家業に精を出す傍ら、本居大平（国文学者本居宣長の養子）の門下生となり、国学、歌学の教えを受け、優れた文人でもあった。

「長野主馬（主膳）と堀内広域」

松阪市御麻生園町の西田稔秋夫妻から幕末秘話（小関魯庵著）なる本を懲戒頂いた。その中に茶業家堀内広域と長野主馬（任官後は主膳を名乗る）の交友について詳しく書かれているので一部を紹介する。

大老井伊直弼の懐刀、安政の大獄で辣腕を揮った長野主馬（主膳）の出生は、本人も一切語らずはつきりしないが、肥後八代城主松井督之公の落胤とも云われ、幼少期は肥後長陽村長野の長野推清邸で育てられ、十一歳の時、和歌山城の紀伊大納言屋敷に移り住んでいる。後に主馬の将来性を見込んだ紀州藩首席家老で新宮丹鶴城主水野忠啓が自分の城に主馬を呼び寄せ養育しているが、そのころ、城中にお茶を納めていた堀内広域と交友を深めている。堀内広域は製茶を本業とするものの本居大平に指示するほどの勉学家で主馬とは何かと気心があつたのであろう。主馬が蔵書家で知られる飯高郡宮前村の大庄屋滝野和勝家に入入りし、知勝の妹たきを娶ったのも広域のしようかいであらうし、また、二人は本居学を松坂「鈴廼舎学舎」で共に学んだことから主馬と広域の交友のp深さが伺える。

なお、広域が任ぐう丹鶴城中に製茶を納めていたのは広域三十歳の頃で、城中の茶の需要は大量で上得意であったと記述している。

(二) 「蔵消失の覚え」 (和歌山藩御用茶問屋小林重兵衛家所蔵)

天和二年(一六八二)江戸本店周辺大火の際、江戸茶問屋が荷主宛に「蔵消失の覚え」には次の記述がある。

天和二年□□焼失の覚

御公儀様御所訴え節

一、土蔵大小四拾戸前

一、茶高凡专万六千本余

内

一、□□□千式百三拾八本

一、小立三拾八本御地焼野荷持

「土蔵焼失の覚」

中村三郎右衛門(丸焼)、福田勘右衛門(丸焼)、長崎六郎次○(丸焼)、中野仁兵衛(蔵専門)、小林庄三郎(蔵式門)、中條瀬兵衛○(蔵式門)、長井利兵衛(無事)、中村喜兵衛(無事)、西村善三郎(無事)、上総屋吉右衛門(丸焼)、小津清兵衛(丸焼)、但大蔵

茗荷屋善五郎（蔵唐門）、富田利兵衛（蔵卷つ）、長井五郎四郎（丸焼）、小津七郎右衛門（蔵式つ）、殿村彦八（不詳）、板屋与兵衛（丸焼）、上山四郎兵衛（丸焼）、低屋伝右衛門（丸焼）、野善助（丸焼）、中野吉衛門（蔵五門）、丸井甚四郎（無事）、小津次郎左衛門（無事）

右之通に御座候は、何れも屋敷之儀は不残焼失

江戸茶問屋中

辰二月御荷主御中様

註一 天和二年の江戸大火と云えば、八百屋お七で知られる火事で、伊勢商人の根拠地、日本橋、伝馬町一帯を焼き尽くした。「土蔵焼失の琶には多くの伊勢商人の名前が見られる。

註二 櫛田川流域の茶は伊勢商人の内、主に射和・相可商人・松坂町商人が扱ったと述べたが、宮川流域の茶については小俣商人・山田商人が集荷し大湊から船運で江戸に送っていたとの記述がある。

註三 畠清次「江戸時代における茶の生産と流通に関する一考察」に次の記述がある。

和歌山藩御用茶問屋小林重兵衛家所蔵（現在の伊勢市小俣町）の文書によれば、小林家は和歌山藩の御用茶問屋として宝暦〜安永期（一七五〇〜一七八一）が盛時とされるが、茶の集荷先は田丸藩眞手組、山神組八ヶヶ村を主とした宮川流域一帯で販売先は江戸を主に相州、信州、北国筋と各方面に及んでいる。この外地元小俣、川端には数名の茶問屋があり、小林家を始め宮川流域の茶は川端に一旦集荷され、茶改役人立会の厳重検査を受け、各自所有の平田船で大湊に運ばれ、大湊の六助船、今一色の忠右衛門、その外船江、川崎、神社の七軒の船問屋を経て、江戸を始め各地に運ばれた。

当時、江戸との取引は、中條瀬兵衛、富田利兵衛、殿村彦八、小津次兵衛、住田屋庄七、蜂屋与六などで多くの仕切書が所蔵されている。また、宮川右岸の山田商人とは、荷（製茶）の扱いにおいて訴訟沙汰も多くあった。（以上概略）

（三）茅広江の茶灯電

橿田川中下流の茅広江神社（松阪市茅広町）に江戸後期に江戸の茶問屋の寄贈で文久二年（一八六二）建立の灯電がある。この灯電は以前には伊勢本参宮街道「津留の渡し」付近に建てられていたもので、川俣谷から陸路を運ばれてきたお茶を、ここで川舟に積み橿田川を

下って大口港（松阪港）から海運で白子港を経由して江戸に運ばれたなごりの灯電で、茶灯電とも呼ばれていた。

（四）江戸初期に射和・相可商人が遙か遠い出羽秋田や酒田と交易があったのか

（著者推察）

江戸時代に入ると櫛田川流域の丹生水銀鉞山も衰退期に入り、多くの鉞山熟練者が職を失う事態となった。その頃、出羽秋田では、長間嶽金山、阿仁銀山など、多くの鉞山が開発され、秋田藩では全国から鉞山熟練者を招聘していた。元和三年（一六一七）の秋田藩「諸国之者調査」によれば、伊勢国から百八十人の鉞山労働者が出稼ぎに出ているが、その殆どが丹生水銀鉞山の従事者であったであろう。

一方、丹生水銀で財をなした射和・相可商人も水銀鉞山の衰退とともに取り扱う商品は変化し、木綿（呉服）や茶などが主要な商品となった。商人たちは鉞山従事者との縁を通して出羽秋田地方に進出し、江戸初期には、既に伊勢の産物と秋田米、庄内米など回漕業を通してノーター取引を行った。その拠点が敦賀湊であり酒田湊であった。当時、出羽地方に商棚を出して活躍した商人に射和の富山九左衛門、阿波曾の浦木（城）三四兵衛、相可の西村宗栄

広信などが知られているが、丹生水銀、射和・相可商人と出羽秋田藩の鉾山開発と関係を示唆するものとして、次の資料がある。

「伊多波武助の活躍」

近世鉾山史に名を馳せる活躍をした人物に伊多波武助（松坂屋武助）がある。武助は波多瀬村（現多気町波多瀬）出身で、後には鉾山請主として財を成し、秋田藩から十分に取り立てられた豪商である。藤原姓伊多波氏系譜（伊多波重徳氏所蔵）には「吾祖紀州田丸領多気郡波多瀬村二住居ス、元禄年間有故テ羽州秋田郡此内岩瀬村移住ス」とあり、出羽秋田と丹生水銀鉾山、射和・相可商人との関係を示す資料として興味深い。

なお、松阪郷土文化会々員米本一美氏の資料によれば、武助の初代は波多瀬村の高橋重行で、羽州秋田に移住して伊多波武助を名乗ったが、この姓の由来は、伊勢・多気・波多瀬の頭文字を充てたという。また、秋田県田代町史によれば、伊多波武助姓は六代続き、鉾山の稼行は初代重行ではなく、二代重克と考えられるとの記述がある。



射和商人発祥の地、今でも当時の面影を偲ばせる。右側は国分家、左側は竹川家（松阪市射和町）



相可商人発祥の地、今では豪商屋敷は見られないが、当時の雰囲気漂わせる街並（松阪市相可町）



今も残る丹生水銀鉱掘跡
（多気郡多気町丹生）



丹生大師山門と丹生の街並
（多気郡多気町丹生）



陸路運ばれた川俣谷茶を川船に積み替えたと云われる櫛田川下流（現両郡橋）付近（松阪市相可町）



江戸の茶商が寄贈した
茅広の茶灯籠
（松阪市茅広江町茅広江神社）

五 将軍徳川吉宗公も川俣谷茶を飲んでいた

将軍吉宗公に川俣谷茶献上、一躍有名になった

「五鈴遺響」飯南郡の巻に、享保元年（一七一六）に川俣谷茶を徳川八代将軍吉宗公に献上した記述がある。

「この地より領主に煎茶、芋、茸貢献す、有往院吉宗公御代より東武（幕府）御用茶を献ず、松坂奉行所及び多良尾四郎右衛門点検して東武に貢す」

享保元年と云えば紀州和歌山藩主吉宗公が将軍に就任した年であり、就任に際し、幕府御用茶として川俣谷茶を献上したのであるが、このことで伊勢茶を一躍有名にした。

江戸時代の将軍飲用茶は、茶壺道中で知られる宇治採茶使の宇治茶と決められ、吉宗公が川俣谷茶を常飲することは許されなかったと思、つが、少なくとも紀州藩主のころは、自藩の茶処川俣谷茶を常飲していた。

なお、記録には残っていないが、徳川歴代将軍で紀州和歌山藩出身者は八代将軍吉宗公をはじめ、九代家重、十代家治、十四代家茂と四人を数えていることから、おそらく幕府御用茶として川俣谷茶の献上は続けられたと考える。このことから川俣谷茶業の盛況ぶりは容

易に想像できる。

六 伊勢神宮御師の土産物として川俣谷茶が使われた

御師とは、伊勢神宮の大麻（御祓）をもって全国を回り、初穂料の寄進を請う人達のこと
で、格式のある家柄で全国に檀家を持ち、伊勢神宮の大麻（御祓）を配り初穂料を集める
他、伊勢の土産物を持ち一種の商行為的色彩も強かったと云われている。

御師と伊勢茶の関わりについて、永正十五年（一五一八）久保倉藤三の「坂東道者日記」
には、御師の持参する土産物として、帯、下緒、櫛、扇、茶が上げられ、また、昭和四十九
年（一九七四）西垣晴次・松島博「三重県の歴史」にも前述の御師の役割の他、神宮の大麻
（御祓）のほか、帯、杉原紙、櫛、布、海苔、茶、伊勢白粉、物さし、扇、曆などが、受け
る初穂料の高によって、それぞれ配られたとある。

また、天保三年（一五九四）「文禄御師人数」には外宮御師数一七七人、慶応三年（一八
七二）「宇治御職名帳」には内宮の御師数一七六人、また正徳年代（一七一〇〜一七一五）
には、御師数外宮五百余名、内宮七百名とあり、室町時代の御師の活動の場は全国津々浦々
に及び格式高い御師では全国四六ヶ国に檀家を持ち、伊勢の産物を土産物として配ったとの
記述があることからして、伊勢茶も土産物としてのほか、一部は商品として流通していたと

も考えられる。

御師の土産物として使ったお茶は、宮川流域の神領度会のもものが中心と考えられ、川俣谷茶が使用された証拠はないが、ただ、向粥見村は古くは神領四足田組に属し、川俣谷が江戸以前から茶の生産が盛んであったことを考えると、極めて早い時期には川俣谷茶も御師の土産物として使われていたのではないか。

以下、御師と伊勢茶について次の文献の記述を紹介する。

○畠清次著「中世にさかのぼる伊勢茶の生産と流通」より抜粋

(一) 御師の土産物として伊勢茶が使われたのは何時の頃かは不明であるが、永録十二年

(一五六九) 七月二十二日、今川氏真から神領一所、馬一疋、大刀一腰、馬具一両の

奉納に対し、外宮御師亀田家から御祓并矢五百、長蛆、五明、宇治茶五袋? 宇治御師の茶の意で山城宇治ではなく伊勢茶であろう。) がお礼に届けられた記録があり、下って信濃の御師の活躍に庶民も含め多くの檀家へ毎年の御初尾に対し伊勢茶を主として三段階に分けてお礼として配られている。

(二) しなの(信濃) 国道者之御祓くはり日記(抄)

天正九年かのとのみとし宇治七郎左衛門尉久家(＊外宮御師家)

・川中しまの分（＊長野県）

加屋すのさいねん寺 上々上（＊上級茶） 一〇袋、あおのり、ふのり

国所こまさはちからのの助殿 茶一〇袋、のし五〇本、おび

いち村といや藤七郎殿 のし五〇本、茶一〇斤、おび

同所御代官文後殿 のし五〇本、茶一〇袋

（以下省略）

此外かつらやよいちない殿同名あまた御座候へ共た、う殿うへの殿この家は同名にて候へ共つつみ市右衛門（米外宮御師）殿御祓参候てめいわくに候中らいのはんちやうすわの殿、のし五〇本おび茶一〇やと、同じそく五衛門殿 茶五ツ
まさはみふせう殿 のし五〇本、茶五袋

（以下省略）

以上は、御師麻生六大夫の善光寺町を中心とする一万九百軒の檀家の一部三百四軒への「御祓くばり日記」の一部である。

(三) 文化十三年～十四年（一八一六～一七）津島御師堀田右馬大夫の手代、山本一六郎が信濃に於ける廻檀記録に、上田城下、松本城下を含む七郡二百九十六ヶ村に対し茶三千

八百三十九袋を一万度祓、三千度祓、二千度祓、一千度祓、大小御札等合五万四千七百二十を配布している

以上の様に中世〜近世における伊勢神宮御師の活躍はすざましいものがあり、御師の寄進に対する土産物（御礼）は、「のしあわび」と「伊勢茶」が主なものであった。

七 粥見村茶業の勃興

（永田善次郎の功績）

鎌倉初期、川俣谷に端を発した茶業は江戸後期になって下流隣接の粥見村で大きく開花した。

飯南町史には、天保年間（一八三〇～一八四〇）、粥見村の永田善次郎は、山城国宇治湯屋谷村の有名な製茶家永谷武右衛門に師事し宇治製茶法を習得、帰村し附近の茶葉を買い集め自ら製茶し、これを宇治に送ったところ大いに賞賛を博したことに自信を得、一層研究工夫し村内に宇治製茶法を普及させたと記述されている。

宇治製茶法とは、元文三年（一七三三）山城国宇治湯屋谷村永谷宗円なる人物が編み出した手もみ製茶法で、以降の日本の緑茶製法の基礎をなすもので、永田善次郎が師事した永谷武右衛門は、その子孫に当たたる人物であろう。

永田善次郎が川俣谷に伝えた宇治製茶法は、従来の製茶法に比べ茶葉は緑濃く針の様に細長く撚れた茶で、川俣谷では雀舌のごとく細く尖った茶の意味で「雀舌茶」として江戸に送り人気を博した。

また、飯南町史には、〃当時の粥見村は畦畔に茶が点散する程度で、農家はこれを自家用に

加工し、番茶と称して一部、松坂地方に搬出していたが、製茶技術もなく品質は劣り、価格も安く「得る所は失う所を償って剩す所殆どなし」と云う有様であったが、永田の宇治製茶法導入で品質は飛躍的に向上し茶の有利なことを得、村人は競って原野を問わず茶を植え暮末には南伊勢屈指の茶産地となった。また、永田が導入した宇治製法はたちまちにして近隣の村々に普及したことから、彼を以って南伊勢茶業の祖と称えられている〃と記している。

註一 粥見村の茶業は永田善次郎の尽力で大いに発展し、この地方の茶は伊勢茶として横浜、神戸に送られ、主にアメリカに輸出された。一方、村内でも茶を取り扱う茶商が出現し、明治二年（一八六九）同村の製茶師は十七人、製茶生産高九千五百七十五貫と記録され、荷主（産地茶問屋）として戸田藤右衛門（粥見村）、高瀬藤八（向粥見村）らは直接横浜や神戸に出て外国商社相手に売り込みを行なった。

註二 明治一五〜一六年頃、村内の山に登って見渡したところ、約二〇〇戸が茶部屋（茶加工場）を建築しているのを見たと云、つ程、茶は盛んであった。また、茶どき（茶の季節）には茶摘み労働者が三千人位、志摩、度会の各地方から入り込んだ

ものである。(古老の言い伝え)

註三 粥見村は周圀山に囲まれ耕地が少ないが、少ない耕地に茶を植えたため米など○食糧が極端に不足し、三千人を超える茶摘み労働者に少量の米に芋などを煮込んだ“おじゃ”と称する粗食を提供したことから、今でも「粥見おじゃ」として当時の粗食を言い伝えられている。(野呂森市氏談)

註四 竹川竹斎の「護国論・後編」には、次の記述があり、永田善次郎の宇治製茶法の普及と時期的に符号する。

「我が国、茶産ノ大ナル事ハ、我が伊勢川上ハ、平素、呑ムトコロノクバンチャヲ出ス二名アリトモ、精製スルコトヲ知ラザリシ一今ヲ去ルコトニ五十七年前、山城宇治ノ人来リテ、雀舌茶ノ製ヲ教エシニ、未ダ三十年ニ及バズシテ、精製ノ煎茶ヲ江戸ニイタシ、国内販売ノトコロ、年々、三万五千金ニモ及ブベシ・云々」米文中の「山城宇治ノ人来リテ、雀舌茶ノ製ヲ教エシ」とは、粥見村永田善次郎を指すものと思われる。

註五 永田善次郎が伝えた宇治製茶法は、さらに工夫改良を加わり伊勢製茶法「片手葉揃採み」として、明治元年静岡に伝わり静岡県茶業発展に大きく貢献した。

静岡県茶業史には、「片手葉揃揉み」の製茶法を静岡に伝えたのは伊勢の岩吉なる人物と記しているが、いろいろの資料からして、「片手葉揃揉み」を創案し静岡に伝えた岩吉は度会町の人ではないかと思われ、岩吉の子孫とされる三重県手もみ茶技術伝承保存会々々会長の中森慰氏がその技法を受け継ぎ、復元に取り組んでいる。

八 江戸時代の伊勢茶流通経路

江戸時代に伊勢茶は伊勢商人の手で江戸をはじめ出羽秋田・酒田まで販売されたことを前項で述べたが、文献から推察すると中世から江戸初期に伊勢茶を商いしていたのは、射和・相可商人で、主に敦賀を拠点に出羽秋田・酒田まで伊勢茶を送っていた。寛文く延宝年（一六六一く一六八一）頃になると江戸の人口も増加し、江戸への陸運、海運網の整備が進むと日本海ルートの出羽秋田・酒田送りは江戸を経由して行われるようになった。この頃、三井をはじめ伊勢商人は大挙江戸に大店を出している。

さて、当時の伊勢茶送りを整理すると次のルートとなる。

(一) 敦賀経由、出羽秋田・酒田送り

江戸時代初期の伊勢茶の敦賀経由羽州秋田・酒田送りの様子について、畠清次「江戸時代における茶の生産と流通に関する一考察」に次の記述があり、少し長文になるが、抜粋引用し記述した。

「伊勢茶の下り始め」

伊勢茶の下り始めは天正一七（一五八九）年丑の二月勢州多氣郡射和・相可の商人が既に出羽・最上へ商棚（出店）を出しているのので、伊勢茶を桑名―横曾根まで川船で遡行し陸揚げして、牧田經由関ヶ原ふ須―醒ヶ井―番場―米原湊―湖水船積―塩津湊を經由、新道野―疋田―敦賀湊へ送りたいと勢州商人が依頼して帰った。早速、時の郡代蜂谷出羽守様へ願ひ出て人足を出して下新道より疋田まで二里の道を作り広げ、塩津谷の浜村に縁者あり、庄屋にも依頼し、岩熊村九か村に多く牛馬を待たせていた処、夏にかけ勢州多氣商人荷物がきたので引き取り支配したと、ある如く米原海道を利用し始めた。

これに先だつて既に出羽・最上へ商棚を出し刀根陸路を経て運びこまれていたと思われる茶は、敦賀茶町の初期を形成していたものである。

―中略―

寛永廿年（一六四三）末の夏茶荷物おびただしく疋田に滞茶したため、一日二度茶荷物を運んだがすかないので、切錢にて粟野十ヶ村、山村等の寄馬で数日付続けてようやく下げ切れた。しかし今度は出航した伊勢茶船の五隻が七尾で囲い船となり越年し坂田へ着いたが、船二年分を請求され、荷主負けて二年分船賃を払わされた。伊勢茶は米原一牛隈川―小行と

なり、正保一年（一六四五）西夏より数万の茶荷物が小浜行となった。困った敦賀の町問屋・塩津・疋田馬借問屋同道にて伊勢商人に託びを重ね、茶荷物が指しもだえ滞る事なき様に誓約する事で、やっと万治三年（一六六〇）子の夏より再び茶荷物は塩津へ復活した。しばらく順調であったものの寛文末頃（一六七一）になると、毎度茶荷物指しもだえ、伊勢商人へは今更言えないので敦賀問屋が困って、正徳元年（一七一）凡そ九十日新茶の始から式番茶迄両組（疋田馬借問屋組・敦賀茶問屋組）相詰め塩津の馬持とも相談の上、役人を立せたり、享保五年（一七二）よりその日に疋田迄送る事としたが五〜七日で疋田宿の滞茶数千本となり、梅雨時期と悪路のため濡茶・荷くずれ等が出て荷印の区別も出来かね問屋難渋の原因となる。

—中略—

新道野から疋田迄の二里の道が悪く水たまり多く、なおさないと馬もけがをし、濡茶等も一日三本五本とあって商人に気の毒千万であるので、五月〜九月迄九十日間人夫を雇い道を直したい。よって茶一本につき銭一文ずつ、半銭は荷主、半銭は問屋方より、馬持は一疋九拾文、その内銀五枚はお上へ差上げ、残りを人足賃や我家業と指合渡世したいと申し出ている。

「付記」

承応四年（一六五五）頃の古文書に九千本下着此内相可・射和二千・いせ松坂・田丸三、四本、ミノ谷（美濃茶）四、五千本とあり、松坂町商人・田丸商人（小俣商人）も敦賀送りに参加していた。

註一 この文面は、古村式著「近世日本海運と港町の研究」等の文献から引用されたものと思われるが、伊勢商人の伊勢茶敦賀送りの様子がよくわかる。

註二 天正一六年（一五八八）、我が松坂城下町が形成される以前に、既に櫛田川下流の射和・相可商人によって敦賀く東北（酒田）の茶流通ルートが出来ていた様で、天正年間になって米原湊から塩津湊まで湖上船運を利用したとあり、伊勢茶の出羽秋田送りは恐らく室町時代まで遡るのではないかと思われる。

註三 敦賀には各地から送られる茶を扱う茶問屋が派生し、茶町が形成されたとあり、敦賀茶問屋と足田馬借問屋の争いが繰り返されてきた様である。

註四 伊勢茶の敦賀送りで活躍した伊勢商人として、富山家・浦木三四兵衛の名があり、彼らは射和商人を代表する豪商で、伊勢茶のみならず、木綿・呉服・薬・伊勢軽粉（白粉）など伊勢の産物を敦賀経由で東北に送り、米など東北の産物を移入する為

替制度を利用した一種のバーター取引を行っていた。

註五 敦賀經由の出羽秋田・酒田送りは、天正・慶長年間を盛期として、江戸時代に入つて東海道・中山道の整備、海運の発達と伊勢商人の江戸進出で衰退の道をたどる。

(二) 信濃路（中山道）經由の江戸送り

中世から近世には、京都、鎌倉、江戸など各地に人口の集中する大小の都市が形成され、これら都市を結ぶ道路網が発達した。中でも徳川家康の江戸開府で江戸の人口が急増し大都市が形成されると、人流、物流の中心は江戸に移り、東海道、中山道、甲州道、日光道、奥州道など江戸に至る街道が整備され、特に関西（京都、大阪）と江戸を結ぶ大動脈として東海道と中山道は重要なルートで、街道筋には宿場町が形成され、また、物資運搬のための伝馬所が設けられた。

さて、江戸中期までの荷物の運搬は主に馬が使われ、松坂にも早く伝馬所が設けられたが、この頃の伊勢商人の荷物の江戸搬送は、東海道よりむしろ信濃路（中山道）を利用して、信濃路の中馬問屋が伊勢商人の江戸送りの荷物を扱った資料が多く見られ、その中に伊勢茶の名も多く見られる。

東海道は大河川の渡しが多く、洪水時には何日も荷止めされることもあり、安全な信濃路を經由したと考えられるが、信濃路は山間部の険しい山道が多いため、その運搬方法は主に馬が使われ、馬による荷物の運搬を業とする中馬制（中馬問屋）が発達し、更に信濃国（長野県）は善光寺を中心に古くから都市を形成し、江戸にも勝る消費地で、特に信濃人は茶好きで、伊勢茶の信濃卸しは相当あったことも中馬問屋の資料で伺える。

以下、畠清次「中馬問屋による伊勢茶の信濃・江戸への流通」の記述（抜粋）を紹介する。江戸中期までは海路の不安定な時代、江戸向荷物は、馬によって中山道―倉賀路（高崎市）まで、それより利根川―江戸川―江戸と多くは信濃を經由した。

・茶屋伊右衛門 松本本町 茶商兼中馬問屋

茶商を本業とし中馬問屋も兼ねていた。貞享三年（一六八八）の「大福帳」によれば、取引先は遠江・甲斐を含む八七ヶ村三四六人に及び、中心は上伊奈三ヶ村二〇七人で、煙草、木綿、海産物の外に伊勢茶、立茶、あべ茶、牛久保茶を取扱っており、伊勢茶は塩尻（東筑摩郡）牧島（更級郡）新町（上伊那郡）等に販売されている。

・茶屋九左衛門 松本本町 中馬問屋

元禄七年（一六九四）十月から同九年一月までの「萬荷物請帳」によれば、取引先は松本町一六人を含め七〇ヶ町村一七四人で、煙草、木綿、茶、鯉節、伊勢かき等、荷受駄数二千駄余で立茶と共に伊勢茶の販売も見られ、併せて櫃荷も見られる。・宝暦一三年（一七六三）五月二〇日、松本町問屋食料七郎、年寄伝左衛門、善六、平兵衛より、幕府役人への「松本町中馬尾往来荷品上」（松本市仲町飯森秀男氏所蔵「中馬一件請綴」より）

中馬伊奈通尾州名古屋戻り

一、櫃荷百駄程但、壺個七、八貫目ヨリ十貫目迄二個付又八三個付壺駄

駄賃 壺駄二付金一步十三匁位

一、伊勢茶六百駄程但 壺個二付十四、五貫目 式個二付壺駄

駄賃 壺駄二付金壺歩ヨリ壺歩四、五分迄

中馬木曾街道名古屋戻り

一、櫃荷百五十駄程 壺個二付七、八貫目ヨリ十貫目迄 式個二付壺駄又八三個二モ仕候

駄賃 同断

一、伊勢茶百駄程但 壺個二付十四、五貫目ヨリ十貫目 式個二付壺駄

駄賃 壹駄二付壹分六、七匁

註 櫃荷は、伊勢神宮「御師」の配る御祓や茶、のし（飽）、曆などの櫃荷の外に茶櫃も多かった。

(三) 海上輸送（船運）による江戸送り

江戸中期になると造船技術や航海技術の進歩と港湾の整備が進み、物資の運搬も馬から海上輸送が主流となった。伊勢商人の荷物の江戸送りも馬から海上輸送へと移り、特に大口港（大阪港）、白子港（鈴鹿市）は紀州藩の手で早くから整備され、大口港一三子や江戸の海上輸送網が敷かれ、伊勢商人の荷物の迅速な大量輸送を可能にした。伊勢商人が全国に先駆けて江戸進出を果たしたのは、この海上輸送を確立したことが大きいと云われている。

大口港―白子港―江戸のルートでの伊勢茶搬送については、大口港積みは、樹田川流域や宮川左岸地域の茶が多く、一方、大湊船積み（伊勢市）は、宮川流域の茶を小俣茶商人、山田茶商人の手で江戸に搬送された。

大口港（大阪）、大湊（伊勢）に至る茶の集荷運搬については、櫛田川左岸域の茶は茅原（松阪市茅原町）、櫛田川右岸並びに宮川左岸域の茶は、相可（多気郡多気町相可）から川

舟に積み替え、櫛田川を下り大口港で海船に積み替え白子港に運ばれ、白子港から千石船で江戸に運ばれた。また宮川流域の茶は宮川を川舟で下り、大湊から江戸に運ばれた。この海上輸送は明治中期まで続き、明治二二年（一八八九）鉄道網の敷設と、明治三二年（一八九九）四日市港の外国直貿易港指定で、その役目は終わった。

註一 当時の紀州藩所轄の海上輸送に大口港と白子港が拓かれていたのは、白子港は天正

年間本能寺の変のとき、大阪堺にいた徳川家康が角屋七郎次郎秀持の船に助けられ、白子浦から三河に逃れたことから、その恩義として徳川御三家紀州藩の所轄港として庇護を受け、紀州藩大口港と白子港のルートが敷かれたとも云われているが（真偽は不明）、当時白子港は伊勢大湊と並んで大型船の入る良港であった。

註二 伊勢茶集荷について、三重県茶業概観の筆者（若林亨）は次の記述をしている。当時の茶の搬送は陸路を経ずして船運が多く、例えば川俣谷（飯南郡）の茶は、若くは人力で櫛田川下流部の茅原（現松阪市茅原町）まで運搬され、ここで川舟に積み大口港（松阪港）で積替えられ、当時紀州藩の所轄領であった白子港を経由して横浜、江戸に送られた。

宮川流域の茶は舟便で宮川を下り大湊（伊勢市）で積替え江戸に送られた。

註三 前述の櫛田川下流部の茅原には大神宮遙拝の大灯電があり（現茅原神社）この灯電は一名「茶灯徳」と称し、江戸の茶問屋の寄進により文久年間（一八六一〜一八六三）の建立であり、これは当時、この辺りの舟積みの便宜のため常夜灯として設けられたと云われている。

註四 竹川竹斎日記、文久二年（一八六二）一月一七日の記録によれば、茶勘定として、上物二千百六十九両。下物二百八十七両。合計二千四百五十六両。外に箱代、川下し、銀四貫五百匁。海上運賃四貫八百五十匁。横浜口銭百七十三匁、計三千百七両の記述があり、川下り、海上運賃を明確に記している。

（四）山城宇治・大坂送り

山城宇治（京都府宇治市）は古くから茶商人の集合地として栄え、全国から製茶を買集め再加工（再製）し宇治茶として流通していた。当然において伊勢茶の宇治茶問屋卸しも行なわれていた。

当時の伊勢茶の宇治ルートは次の様である。

川俣谷茶の宇治送りは、川俣越又は仁柿越―奥津―太郎生―長瀬―西田原―笠置を経て山城宇治へ、又は、笠置で川船に積み替え木津川を下って大阪に至るルートがあり、元文元年（一七三六）の大阪における製茶移入量は一四〇万斤で、主に山城、伊賀、伊勢から入った（大阪市史）とあり、川俣谷茶もこのルートで運ばれた。

古来、一志郡川上から長瀬を経て笠置に至るコースは、「茶の道」と呼ばれ、茶を積んだ馬車の往来が明治時代まであった様である。

なお、このルートの伊勢茶搬出は伊勢商人より近江商人・大阪商人の関与が大きかったとも云われている。

註 北伊勢の茶（菰野・水沢など）は山城宇治に運ばれ宇治茶として販売されたが、その搬送ルートは次の通りである。

員弁郡、朝明郡、三重郡の北伊勢の茶の多くは、鈴鹿山脈の峠越で近江の茶どころ政所（現滋賀県永源寺町）を経由し山城宇治に運ばれた。鈴鹿山脈峠越は、古くから近江商人によって拓かれ、北伊勢の産物の山城宇治への搬入道として、八風越（石樽村―朝上村切畑―愛知郡東小掠村―八日市―宇治）と千草越（千草村―蒲生郡市原村―八日市―宇治）がある。

北伊勢の茶は、主に近江商人の手で峠を越へ山城宇治に運ばれ、宇治茶商によって「宇治茶」として全国に流通し、現在もその様相は変わっていない。

九 安政六年、最初の日本茶輸出は、

殆どが伊勢茶であった

(一) 横浜港からの輸出

安政六年（一八五九）日本は外国の開国要求に屈し、遂に函館、横浜、長崎の三港を開き、外国との貿易が本格的に始まった。

当時、日本からの輸出品は生糸、お茶、菜種油などの農産物が主で、特に生糸とお茶は国を挙げて奨励した。

射和村の竹川竹斎は、早くから中央政界に通じ、特に勝海舟らと親交厚く情報を得ていたため、来るべき開国に備え生糸、お茶が輸出品として需要が見込めることを見越して「開墾茶桑園図帳」を発起し、農民に原野を開墾し桑、茶を植えることを勧めた。

一方、竹斎から情報を得た大谷嘉兵衛らは横浜に出て、郷里の川俣谷茶を積極的に買い集めたため、川俣谷では茶栽培熱が高まり、山間急傾斜地を問わず茶が植えられた。

日本茶業史には、安政六年横浜港からの最初の日本茶輸出货量は四〇万斤で、その殆どは伊

勢茶であったと記述しているが、この伊勢茶は川俣谷茶が中心であった。

日本茶の最初の輸出先は主にイギリスであったが、イギリスは紅茶消費国で緑茶の消費が見込めないと見るや、輸出先をアメリカに求めた。当時アメリカは建国百年ほどの国で、だ、喫茶（紅茶）文化が定着していなかったため、安い日本茶は面白いほど売れ、日本茶ブームを巻き起こしたと記述されている。

日本茶輸出の動きは、たちまちにして全国に広がり、明治維新後の日本の近代化に大いに貢献したが、日本茶輸出の先鞭をつけたのは川俣谷の先覚者達である。

横浜開港以来、九年後の慶応三年（一八六八）には神戸港が開かれ、粥見茶などは神戸港に相当量送られた模様である。

また、川俣谷では、お茶を扱う産地荷主（茶仲買人）が次々と生まれ、横浜の小倉藤兵衛や大谷嘉兵衛などに茶を送り、または神戸開港に伴い神戸に茶売込所を設け直接外人商社に茶を売り込む荷主も現れた。

註一 幕末〜明治初期における江戸、横浜の伊勢商人（製茶売込商）として、次の名前がある。

小倉藤兵衛、中條瀬兵衛、西村嘉兵衛、野崎久治郎、長崎瀬兵衛、茶屋順之助、板

屋与兵衛、茗荷屋善五郎、長井利兵衛、御影堂小泉伊兵衛、小橋屋清左衛門、小津清左衛門、川喜多久太夫、大谷嘉兵衛

註二

幕末〜明治初期の産地荷主として、次の名前がある。伊藤小左衛門（室山）、駒田

作五郎（掠本）、園浦喜平治（下之川）、向田中兵衛（同）、茶屋喜之助

（同）、倉田仙助（同）、天満屋孝兵衛（同）、柏屋久蔵（同）、中井甚兵衛

（太郎生）、岩崎文右衛門（南家城）、岡田芳郎（柚原）、中山林右衛門

（同）、竹岡源右衛門（仁柿）、堀出忠右衛門（同）、柳瀬兵右衛門（同）、

永田善次郎（粥見）、長田太兵衛（同）、山本長八（同）、戸田藤右衛門

（同）、高瀬藤八（向粥見）、滝川屋吉郎右衛門（下滝野）、堀内利右衛門

（宮前）、井上八郎右衛門（同）、角屋市兵衛（赤桶）、久保善兵衛（田

引）、水谷勝蔵（八手俣）、上見貞助（同）、村田文蔵（出口）、西林宗助

（七日市）、田中谷蔵（同）、中西惣蔵（神瀬）、吉田善三郎（野尻）、小林

興七（丹生小）

註三

当時（幕末〜明治）日本茶は、なぜアメリカで売れたのか。

当時、紅茶の権益はイギリスの手に握られていて、アメリカ人にとってイギリス経

由の紅茶は相当高価なもので一般には飲めなかった。そこに安価な日本茶が入ってきたので日本茶ブームが巻き起こったと伝、えられている。或る旅行者の日記には、ニューヨークでは日本茶ブームに沸き、千五百もの日本茶喫茶店が出来たと記している。アメリカ人は日本茶に砂糖やミルクを入れて飲んでいたようだ。一般のアメリカ人が最初にお茶を飲んだのは、紅茶ではなく日本茶だったのではなからうか。

註四

輸出茶は、横浜港或は神戸港に集められ、外人商社に売り渡され、外人商社は港の居留地に「お茶場」と称する再製場を設け、焙じ茶の如く強火で火入れを行い、中には着色をして船積みを行、つ者も現れた。一方、産地でも売れるに任せ、粗製乱造に陥り、アメリカで日本茶の評判を落としたため、大谷嘉兵衛は全国を遊説して日本茶の品質向上に奔走した。

註五

当時の外人商社との茶取引について「日本茶業史資料集成」には次の様に記述している。

開港と共に横浜港居留地には続々と外国商館が進出し、茶以外にも多くの輸出品を扱っていた。横浜港居留地に最初に進出したのはイギリスのジャーデン・マジソン商会、二番目は

アメリカのウォルシュ^{ニホ}ール商会で、日本人は、これを「英一番館」「米一番館」と呼び、文久三年（一八六三）頃には百一〇番館まであり、その内商館は八五館であった。

当時の輸出は、外国商館の仕事であつて、日本人が関与したのは商品を外国商館に売り込む迄で、貿易の実権は外国商館の手に握られていた。

まず、茶産地の荷主から開港場の売込み商人のもとへ製茶が届くと、売込み商がこれを居留地の外国商館に配り歩き交渉に当り、商談が纏まると商館側の検査が行われ引き取られるが、主として商館側の交渉人は商館に雇われた中国人で、かれらは中国流の強引且つ巧妙なかけひきを心得ており、外国商館はこれを最大限に利用して膨大な利益を得たと云われる。

取引には、売買契約書も結ばれず、一切の損害も売込み商の肩に背負され、手付金もなく、貿易市況が不利になると成立した商談も「ペア」にするなど、極めて一方的な取引で、このような外国商館の横暴は、いわば当時の国際的な日本の地位を物語っている。

以上のような外国商社との取引に風穴を空けたのが大谷嘉兵衛である。彼は外国商社（スミスパーカー商会）の茶買受人となるや、確かな目（茶を観る目）で正当な価格で、しかも現金買付を行ったことから、産地荷主はもとより外国商社からも信頼を得た。

大谷は、この信頼を礎に見本取引を敢行し、わずか三ヶ月で七十万斤の製茶を買い付け、支払った現金は二十六万七千両で茶貿易界に新記録を打ち立てた。

(二) 四日市港からの輸出

開国当時の製茶は、主に横浜、神戸港から輸出されていたが、清水港、四日市港が、明治二三年（一八八九）に横浜、神戸の中間港として特別輸出港に編入され、明治三二年（一八九〇）八月に開港外貿易港として指定されたことに伴い、静岡茶は清水港から、伊勢茶は四日市港から輸出されることになった。

四日市港には外国商館や横浜茶商が支店を構え伊勢茶の買い付けを行ったが、これらを仲介する産地茶商（問屋）が続々誕生した。

明治四一年（一九〇八）の四日市港からの茶輸出額は、四日市港総輸出額の一五、四％、額で四六万余円であった。当時三重県の茶産額は五八万貫で、その三分の一が四日市港から輸出された。

横浜港、神戸港から輸出されていた川俣谷茶も四日市港から船積みされることになるが、この時期になると北勢地方（四日市、鈴鹿、亀山など）に大茶産地が形成され、株式会社伊

藤製茶部（三重郡四郷村）や中島末冶郎商店（三重郡追分村）など有力な産地茶問屋が現れ、外国商社を通さず直接外国に売り込みを行った。

註一 当時の輸出茶を扱っていた県内の茶商として、下記の名前が見られる。

＊印は荷主兼茶商

（桑名郡）伊藤茂三郎商店、近藤又四郎商店、水谷多四郎商店、小池富治郎商店

（四日市市）位田鉄治郎商店、近藤又四郎商店、水谷多四郎商店

（三重郡）株式会社伊藤製茶部、中島末冶郎商店、＊小林峯松、＊伊藤藤治、

＊有竹民蔵、＊川北紋七

（鈴鹿郡）川北留吉商店、村井嘉太郎商店、＊小山興吉

（津市）亀井利兵衛商店、坂口茂平商店

（飯南郡）杉本徳蔵商店、老平製茶部、茶重商店、鈴木徳造商店、山本嘉助商店、

山村亀吉商店、竹内房吉商店、＊戸田藤右衛門、＊高瀬藤八、＊森本市郎栄

門、＊大谷吉兵衛

（多気郡）米野呂清兵衛、＊森井勘右衛門

（宇治山田市）小津幸次郎商会、中川久兵衛、吉川齋吉商店

(志摩郡) 寺尾庄蔵商店、＊山川為助

(伊賀上野) 木津平一郎商店

(阿山郡) 勢羽鉄治郎商店

(三) 川俣谷茶の輸出で活躍した先人

○竹川竹斎(一八〇九〜一八八二)



文化六年五月二五日、飯野郡射和村(現松阪市射和町)の射和商人で知られる富豪竹川家(東竹川家)六代・政信の長男に生まれる。二十一歳のとき、地域の水田を潤すため私財を投じて「上の池」を完成させ、二十六町歩の水田の灌漑を完成させた。竹斎は智謀に富み、若くして中央政界に通じ、特に勝海舟とは親交厚く情報を得ていたため、来るべき開国に備え、輸出品として生糸、茶などの需要が増えることを見越し、農民に桑、茶を植えることを勧めた。また、農民が安定した現金収入

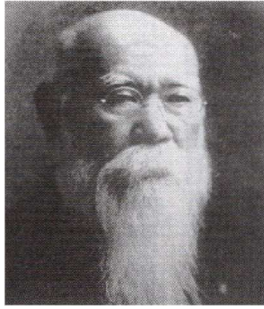
を得るには、作物を偏らず、一枚の畑に茶を畦状に植え、間に桑を植え、畑の周囲に紙木

(紙の原料になる木)を植えることを勧める「桑茶並ヒニ紙木植方之書」を著し、農民に桑、茶、紙木の栽培を奨励した。

竹斎は、粥見村の永田善次郎などと連携し、川俣谷茶を買い集め、実弟の養子先で江戸に大店を持つ伊勢商人「竹口家」に送り、江戸で販売し、更に横浜に送って外国商社に売り込んだ。

竹斎の尽力があつて、南勢地方の茶は有利に取引されるに至り、南勢茶業は大いに繁栄した。明治一五年(一八八二)十一月一日没、享年七四歳(竹斎資料ほか)

○大谷嘉兵衛(一八四四〜一九三三)



弘化元年一二月二二日、飯高郡谷野村(現松阪市飯高町宮本)で父吉兵衛、母つなの四男として生まれる。幼名藤吉、八歳の時、大谷家の菩提寺長楽寺の住職から約五年間、読み書き、そろばんを習い一二歳の頃から家事を手伝いながら読書で独学を続ける。

嘉兵衛一九歳の時、隣村出身の横浜で製茶売込商を営む小倉藤兵衛(伊勢屋藤兵衛)に奉公し、見込まれて二二歳の時、小倉藤兵衛

の養子となる。しかし養父と意見が合わず養家を出て、慶応三年（一八六七）にスミスベーカー商会の製茶買受人となって、大阪を拠点にして山城、近江方面から七〇万斤の製茶を買い付け、茶貿易界の新記録なる。大谷の製茶買い付けは、すべて見本取引で現金で支払い、支払った金額は二六万七両にのぼり、その大胆な取引は人々を驚かせた、この取引でスミスベーカー商会だけでなく、大谷自身も巨利を得、これを元手に横浜に茶売込商「大谷」を開業し独立する。

茶貿易で大成功を納めた大谷は、当時、粗製濫造で日本茶の評判が落ち、輸出の将来を憂い、製茶改良と不正茶の根絶に立ち上がり、明治一二年（一八七九）第一回全国製茶共進会を横浜で、明治一六年（一八八三）には、第二回全国製茶共進会を神戸で開催し、同時に全国茶業集談会を開催し、製茶の改良、不正茶の撲滅を決議するとともに、郷里三重県の駒田作五郎から上申された「茶業組合設立の建議書」を採択し、国に働きかけを行なった。茶業組合の設立は、駒田作五郎と大谷嘉兵衛の尽力により、明治一七年（一八八四）農商務省令「茶業組合準則」を以って、全国茶生産府県に県単位の取締所と郡単位の茶業組合設立となって実現し、明治二三年（一八九〇）に各府県の茶業組合等を統率する茶業組合中央会議所が東京に設立されると大谷は議長（後に会頭と改正）に三六歳の若さで就任し、爾来、昭和

四年まで実に三六年間、日本茶業界のトツブの座に在る。

明治中期になると、主な輸出先であるアメリカにおいて、ブラジルのコーヒー、インド、セイロンの紅茶の輸入拡大で日本茶輸出に危険感を持った大谷は、海外での日本茶宣伝に力を入れ、各国の博覧会に日本茶を積極的に出品した。

中でも、大谷の偉業の一つとして有名なのは、明治三二年（一八九九）米国フィラデフィア万国商業大覽会に日本代表として出席した大谷は、アメリカ合衆国大統領マッキンレーに面会を求め、当時、日本茶に対して高率の関税を廃止すべく直談判し、遂に茶税廃止法制定をさせたことである。

また、大谷は財界人としても大きな功績を残している。その一つは「大西洋海底電線」敷設の建議である。明治二二年（一八九九）フィラデフィア万国商業大会に日本代表として出席した際に、自由経済交流には、日本とアメリカを結ぶ太平洋海底電線の敷設の必要性をアメリカ政府に働きかけ、遂に太平洋商業電線会社の設立に至るなど、商業通信史上にも大きな足跡を残している。

この様に大谷の業績は、日本のみならず世界を舞台にしているだけに、従来から地元への貢献はあまり語られていないが、郷里三重に於いても、伊勢茶の買い付けのみならず、大口

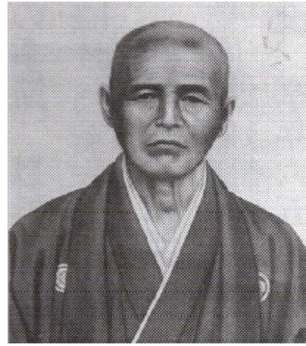
港（松阪港）の改修、地元川俣の櫛田川に架かる大谷橋架橋、または地元川俣小学校建築への支援など数え切れない。

大谷は昭和八年（一九三三）二月三日、八九歳にして生涯を閉じるが、茶業界では「茶聖」として、その偉業を称えられている。

以上の大谷の偉業に対し、明治四〇年（一九〇七）貴族議員、勲三等瑞宝章、大正四年（一九一五）正五位、大正二一年（一九二三）紺綬褒章が贈られ、更に横浜市宮崎町伊勢山大神宮境内、静岡市清水公園に顕彰碑が建立されているが、大谷の生誕地、松阪市飯高町宮本にも平成一三年に顕彰碑（胸像）が建立された。

註 文中の駒田作五郎は、河芸郡掠本村（現津市芸濃町掠本）の人、明治十一年紅茶の生産に本格的に乗り出しアメリカに直輸出を試みるが、当時、日本茶は粗製乱造に陥り外国での評価を下げていたことから、此れを改善には生産者の団結が必要と明治十六年茶業組合の設立を建議し、中央に在る大谷嘉兵衛と連携し政府に働きかけ、翌年の明治十七年明治政府をして「茶業組合準則」発令、全国に茶業組合が結成された。

○高瀬藤八（一八四八〜一九一三）



嘉永元年九月十日多気郡向粥見村（現松阪市飯南町向粥見）に生まれる。当時、向粥見村は川俣谷では唯一多気郡に属し、勢州田丸領下で古くは神領域でもあった。高瀬家が何時ごろ茶業を始めたかは明らかでないが、菩提寺の過去帳から推察すると江戸初期の寛永の頃、この地に落ち着き農業を始めた形跡があり、幕末には相当規模の茶園を持っていた。藤八は谷野村の大谷嘉兵衛が横浜に出て茶売込みを行っているのに刺激され、慶応三年（一八六八）、神戸港でも茶貿易が始まるや、二〇才で神戸港近くに茶売込所をき、外人商社相手に川俣谷茶を売り込んだ。藤八は著者の曾祖父にあたり、祖母からの話では、藤八は明治の終わりごろも自家製茶のほか、付近農家の製茶も買い集め神戸に送り、茶どき（茶の季節）以外は神戸の店に逗留し製茶を売り込んでいた。藤八大福帳によれば、明治三〇頃においても相当量の製茶を買入れている。

向粥見村は明治二二年（一八八九）、粥見村に合併したが、その後も藤八は粥見村議、向粥見区長を務め、櫛田川に架かる新高橋や有間野橋架橋に尽力している。大正二年八月一五

日没、享年六五才

(資料)

○大谷嘉兵衛が赤桶村産地荷主角谷市兵衛に宛てた書簡(飯高町赤桶角谷宏氏所蔵)

(文訳一大谷嘉兵衛資料館展示)

拝啓、爰許景況、本年ハ氣候早きカ○め誠の外多入荷にて相場もまた豫想外の安直を現し、一時十五日出帆へ八駿遠物凡壹滿斤内外賣込相成、此直段上物四十五弗より下物三十八弗迄○合出来申候而して跡人氣八何れも次回船出帆(四月廿七日)積入の氣○にて最早其際迄ニハ多額の入荷も可○之ニ付、一層安氣を含ま先駿遠上物三十式、三弗より三十五弗、中物三十弗前後、又下物ニおいて八、廿七、八弗位の相庭も可有之をと愚考仕候、付てハ貴地邊の品右廿七日出帆船ニ多少間ニ合可申候 若間合候物ハ上物三十弗前後、中物二十七、八弗、下物二十五、六弗位の見込ニ御在候得共、滿一間ニ合不申か、又ハ出帆後の入荷ハ何様造下落するとも今より豫報ハ申上兼候、尤例年此断八日増に下落可致候間、触ニ御注意御掛引被遊度何れ様廿七日の出帆船の現状を見て以て五月十日出帆の見込御通報可申上候、飛脚船出帆の定期日地ニ申上候、

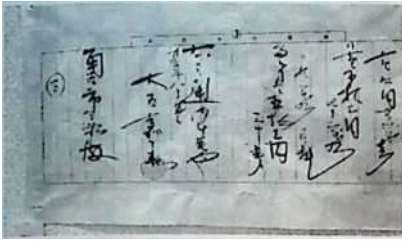
二番船出帆 四月二十七日 三番船出帆 五月十日 四番船出帆 五月二十一日
 五番船出帆 五月三十一日 六番船出帆 六月十二日
 右之外臨時出帆船も有之候間、其時に御報知ハ可仕候得共、○御含み造申上候

四月十七日

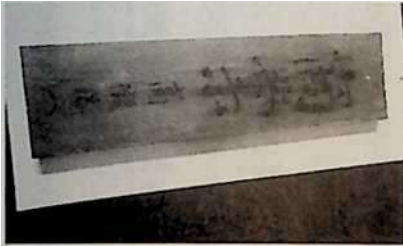
大谷嘉兵衛

吉助

角谷市兵衛様



大谷嘉兵衛の製茶仕切り書
 (飯高町赤桶、角谷宏氏所蔵)



高瀬藤八の神戸港製茶売込所
 看板と製茶仕入帳類
 (飯南町高瀬家所蔵)

— 参 考 —

(註1) 輸出茶の仕向け先

(単位:千ポンド)

	米国	英国
1862 (文久2年)	1,305	2,845
1863 (文久3年)	1,979	1,630
1864 (元治元年)	2,475	2,506
1865 (慶応元年)	6,533	989
1866 (慶応2年)	6,723	667
1867 (慶応3年)	7,685	1,257
1868 (明治元年)	10,183	489
1869 (明治2年)	13,464	100
1870 (明治3年)	15,714	25
1871 (明治4年)	16,043	—

(日本茶貿易概観)

註2) 四日市港茶輸出数量

(単位:千ポンド)

年次	輸出址	年次	輸出量	年次	輸出量
明治37年	565	明治44年	1,065	大正7年	3,309
明治38年	944	大正元年	1,530	大正8年	2,087
明治39年	850	大正2年	1,897	大正9年	1,318
明治40年	942	大正3年	2,438	大正11年	1,064
明治41年	1,515	大正4年	2,339	大正12年	1,719
明治42年	1,551	大正5年	2,314	大正13年	1,418
明治43年	2,007	大正6年	3,367	大正14年	616

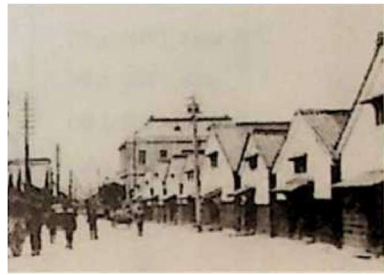
(四日市開港百年記念資料)



横浜港外国居留地の賑わい（広重画）
— 安政6年（1869）横浜開港 —



明治32年（1899）外国直輸出港に
指定当時の四日市港



同蔵町付近の倉庫群



江戸時代に使用された製茶貯蔵兼
出荷用茶壺（飯南町高瀬家所蔵）



製茶出荷用茶箱
（飯高町角谷家所蔵）

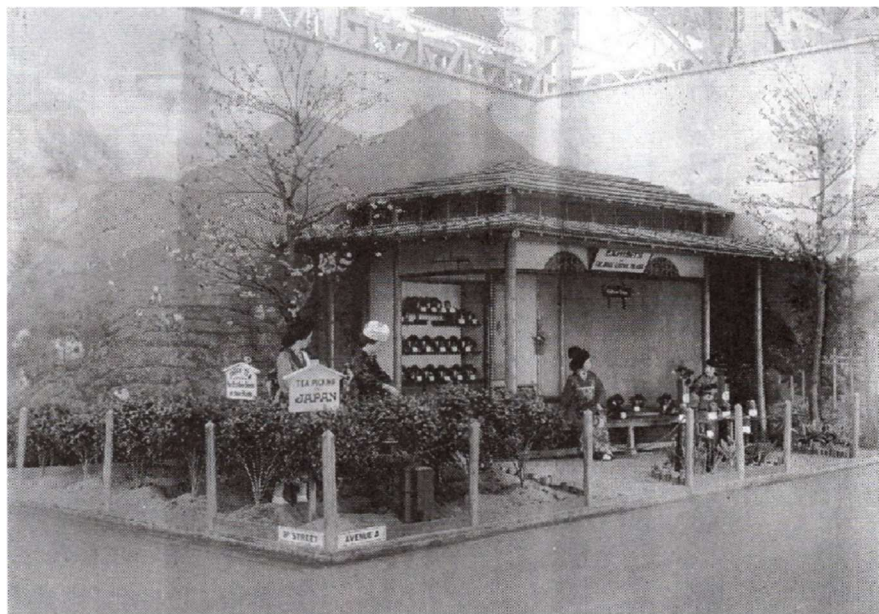


製茶輸出容器（茶箱）
に添付した四日市中島
製茶の日本茶ラベル
（四日市印刷工業心（所蔵））



同日本茶ラベル
（日本茶業中央会提供）

* 当時は日本茶ラベルを通して日本を紹介していた



米国シカゴ万国博覧会における日本茶宣伝館明治 38 年（1905）

く伊勢茶の名声が消え去ったく

幕末く明治にかけて茶輸出の先鞭をつけた伊勢茶も明治の中頃になると、茶輸出に陰りがみえ、全国的な茶の増産は粗製乱造を生み、滞茶の増加と価格の低下、更にはアメリカが日本茶に対する高額課税で歴史ある川俣谷茶にも苦難の時期を迎える。アメリカ向けの日本茶輸出は大谷嘉兵衛の懸命の努力（品質改良と茶課税撤廃）で持ち直すかにみえたが、イド、セイロンなどの紅茶攻勢、昭和に入ると日本の軍国主義の台頭でアメリカとの関係は深刻化し輸出はストップした。アメリカ輸出の主要産地であった伊勢茶は最大の危機を迎え、三重県茶業聯合会議所は販路を北支（満州）やロシアに求め、販路確保に奔走したが、戦争突入で茶輸出の道は完全に閉ざれるに至った。

一方、国内でも明治五年（一八七二）群馬県高岡に全国初の近代的製糸工場が完成、三重県にも続々と大資本の製糸工場が進出し、国の方針も茶業振興から養蚕振興に転換を余儀なくされ、戦時（昭和一五年）の川俣谷の茶固面積は明治二〇年に対し三分ノ一まで減少した。川俣谷でも茶園の中に桑を植え、また、こんにやく芋を植える混作畑が多く見られ、大

部分の茶農家は茶と養蚕、こんにやく芋の複合経営を行なった。

しかし、川俣谷では茶園を完全に他作物に転換せず、僅かながらも茶樹を残す努力が行なわれた結果、戦後の茶園復元は他の地域より早かったと云われている。

この様な事態において終戦を迎えた三重県茶業界は、緊急課題として茶園復元（増産）に取り組み、戦後の茶不足もあって昭和五〇年代には明治初年の茶園面積まで回復しましたが、輸出に頼っていた三重県茶業は国内の販路獲得に後れをとり、宇治茶や静岡茶の原料茶供給産地として生きるすべをなくし、何時しか歴史ある伊勢茶の名声も忘れ去られてしまった。

また、戦後は木材景気に沸き、幕末から明治初年に急傾斜地まで植えられた茶園（茶山）は植林され川俣谷の急傾斜地茶園は自然消滅した。



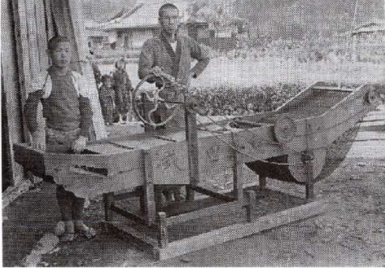
アメリカ向け輸出が止まり、伊勢茶は北支（満州）に販路を求める。—満州大連での伊勢茶喫茶所—昭和7年



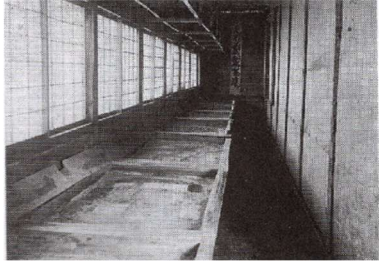
同上昭和9年（1934）



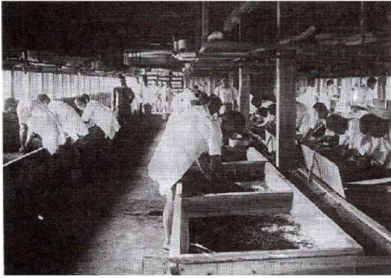
仙台大博覧会における伊勢茶接待所 昭和3年（1928）



共同茶葉蒸器（飯南町粥見）



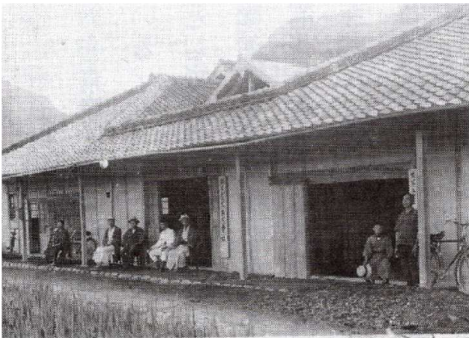
共同製茶場（飯南町粥見）
手もみ茶台（焙炉）が並ぶ



手もみ茶製造風景（場所不詳）



飯南郡茶業組合事務所での
茶取引商談会（松阪町新町）



粥見製茶販売株式会社
昭和18年製茶統制令により
解散
戦後は川俣谷唯一の茶問屋
「浦辻清香園」として再出発
した

(一) 深蒸し茶の普及

戦争で衰退の一端を辿った川俣谷の茶産地に再び復興の道が拓ける。戦後の茶業振興策と茶優良品種「やぶきた」の導入で川俣谷の茶園面積は徐々に回復に向かっていたが、昭和三八年（一九六三）頃、この地域の茶を主に東京に送っていた松阪市の老舗茶問屋「老松園」社長杉本健太郎が消費者の嗜好を調査し、東京の水に合ったお茶作りを試み、試行錯誤の上「深蒸し茶」を試作し、飯南町や飯高町の茶農家を集め、深蒸し茶研究会を発足



(深蒸し茶)

させ普及に努めた。この深蒸し茶は東京で人気を集め、飯南の深蒸し茶として再び脚光を浴びることになった。深蒸し茶は、茶の葉を深く蒸して茶葉の葉柄や軸などに多く含有するテアニンなど旨みの成分の浸出を容易にする製法で、茶品種「やぶきた」を用いた深蒸し茶は旨みが濃くまろやかな味のお茶として全国や関西品評会で常に上位を独占し、深蒸し茶ブームの先駆けとなった。

深蒸し茶の普及で川俣谷地域の茶は再び増加に転じ、平成一六年（二〇〇四）には三六九ヘクタールと明治四三年の水準まで回復したが、近年はペットボトル茶の普及から川俣谷地域など良質茶産地は苦境にたち、茶農家は生き残りをかけて協業組織による経営規模拡大と機械化、直販路の開拓などに取り組んでいる。

（二）戦後、川俣谷茶業の復興に尽力した先人

○中嶋末治郎（一八九九～一九九〇）

明治三二年四日市市追分で製茶卸売業を営む中嶋家に生まれ、二代目末治郎を襲名、先代末治郎は明治八年（一八七五）、中島製茶を創業、明治三二年（一八九九）四日市港が海外貿易港の指定を受けると伊勢茶をアメリカや満州に直輸出を試み伊勢茶の販路拡大に尽くした人物であるが、二代目末治郎も先代の偉業を引き継ぎ、戦後の混乱期の三重県茶業発展の礎を築いた一人である。

川俣谷と末治郎の関わりについては、川俣谷唯一の茶問屋浦辻新一（後述）が集荷する川俣谷茶を一手に引き受け有利販売に貢献したほか、茶農家の製茶機械導入に資金援助したほか、昭和二七年に松阪市に設置した茶冷蔵保管施設の資金を提供するなど南勢茶業復興に多

大の貢献をした。

現在の松阪茶が関西茶品評会で上位入賞を続けているが、この母体である関西茶業協議会設立を提唱し初代会長を務めたほか、県茶商組合理事長など数々の要職を歴任し、その功績で昭和四一年藍綬褒章、四五年勲五等旭日双光章を授章、平成二年三重県茶業界から胸像が贈られ、中島製茶社屋玄関前に建つ。

○野呂恭一（一九一九〜一九九五）

大正八年飯南郡宮前村（現松阪市飯高町宮前）の素封家に生まれ、郷里の中学校教師になったが、周囲の強い勧めで県会議員となり、四〇歳の若さで県議会議長に推挙され、昭和三八年衆議院議員となり連続七期当選、昭和五四年には厚生大臣を務めるなど輝かしい経歴の持ち主である。

野呂は政務多忙にも関わらず、茶業に関しては生家が茶栽培を行っていたこともあって特別の思いを持ち、県会議員転向当時から戦後の本県茶業の復興に力を注ぎ、昭和三四年には県内の茶生産者、茶業者をまとめ三重県茶業会議所を設立し、自ら会頭となって戦後の三重県茶業復興の先頭に立った。

野呂の数々の功績に対し、昭和六二年）三重県民功劳賞、平成二年勲一等瑞宝章が贈られ、

平成一六年には松阪市制七〇年に際し、故人に対して松阪市名誉市民の称号が贈られた。

三重県茶業界でも野呂の長年の茶業界への貢献に対し胸像を贈り、野呂の故郷飯高町宮前の飯高町老人福祉センター玄関前に野呂の胸像が建立し功績を讃えている。

○杉本憲太郎（一九一九～一九九六）

大正八年生まれ、三重県立津中学校（旧制）卒業後、野村銀行に就職するが、昭和一五年兵役（陸軍大將）で終戦、復員後、株式会社「老松園」社長として茶卸売業に専念の傍ら、三重県茶業会議所副会頭、松阪商工会議所会頭などの要職を歴任する。

杉本の数々の業績の中で特筆すべきは、常に茶商売は消費者の目線にあるべきとの考えから、消費地に向いて嗜好性を調査し商品に活かす努力をしていたが、関東方面に販路を広げるに当り、東京で「香りと濃い味の茶」が好まれる傾向にあることを知り、通常より製茶蒸行程を長くした深蒸し茶を開発したことである。

杉本はこの茶を東京で販売するに於いて、更に東京の専門店や消費者の意見を聞き、当時、県で茶業専門技術員をしていた若林亨（後述）に技術面の協力を求め、「深蒸し茶」を開発し、飯南方面の茶農家を集め深蒸し茶研究グループ（南勢優良茶研究会）を組織し、その品質向上と深蒸し茶の産地化に貢献した。杉本の開発した深蒸し茶は東京方面で人気を博

し有利に販売されたため、飯南地方の茶農家の間に普及し、各種品評会で農林水産大臣賞を連続受賞するなど、その品質の良さは全国に知られる様になった。

杉本は、深蒸し茶の開発の功績で昭和六三年黄綬褒章、平成六年勲四等瑞宝章を授けている。

○若林亨（一九一五～一九七〇）

大正四年飯南郡粥見村向粥見（現松阪市飯南町向粥見）の茶農家の次男に生まれ、県の茶業専門技術員や茶業試験場長を勤める。

若林の業績の中で特筆すべきは、昭和三八年頃、杉本憲太郎（前述）と二人三脚で、当時、東京で「蒸程度の深い茶」が売れていることに目をつけ、「深蒸し茶」の栽培製造技術进行研究し、思考琢磨の結果、川俣谷地域に於ける深蒸し茶の製造技術を体系化し、今日の飯南・飯高地域の深蒸し茶を技術面で支え、杉本をして「飯南の深蒸し茶は若林さんの尽力がなければ成し得なかった。」と言わしめた。若林は昭和二五年及び昭和三九年に農林（水産）部が発行した「三重県茶業概観」の執筆者でも知られるが、若林の蒐集した資料は、後の三重県茶業史発刊に大いに活用された。

○浦辻新一（一九〇八～一九八八）

明治四一年飯南郡粥見村の旅館業を営む浦辻家の長男に生まれる。旅館業は父の代に他家に譲り廃業したため、昭和初年、アメリカへの茶輸出が停滞し対策に苦慮していた茶荷主と共同して、旅館の家屋を利用して粥見製茶株式会社を立ち上げ、事務方として国内販路獲得に奔走したが、戦争突入で茶も統制品となり会社は解散せざるを得なかった。戦後間もなくこの会社の跡を引き受け、茶問屋「浦辻清香園」を開業し、川俣谷地方の茶を集荷、四日市の中島製茶を通して有利販売をした。当時はこの地方の唯一の茶問屋として茶生産者が集まりサロンのような場所となっていた。

○横山俊祐（一九一三～二〇〇三）

大正十五年長野県に生まれる。昭和二六年、三重大学三重農林専門学校を卒業後、三重県に就職し、一貫して茶業の試験研究に取り組み、数々の研究成果を残すが、その中でも昭和四五年に発表した「送風法による茶園の凍霜害防止技術の開発（防霜ファン）」は、画期的な開発として全国的に注目された。

茶栽培に於ける四月～五月上旬の茶摘み直前に襲う晩霜害は、一番茶の収量を壊滅させ、茶業経営に大きな損害を与えることから、晩霜害の防止に茶農家は苦心するが、なかなか効果的な方法は見出せなかった。

横山は、降霜の条件として無風快晴の日、暖められた地面が放射冷却により地表近くの温度が異常に降下する。このような条件下では地表ハゝ十メートル付近に暖かい空気の層（逆層）があることを発見し、この空気の層をファンにより茶園面まで降下させることを原理とした「防霜ファン」を開発した。この技術開発は防霜効果が高く、しかも省力的であることから全国に普及した。

特に川俣谷のような山間地では、茶摘み直前の降霜被害は一番茶の収量に壊滅的な被害をもたらすだけに、茶農家の悩みの種となっていたので、農家は競って「防霜ファン」を設置し、この地域の茶業経営は飛躍的に安定した。

横山の「防霜ファン」は、その効果、普及性を高く評価され、平成五年には、日本の農業試験研究百周年記念事業に当り、最も優れた研究として表彰を受け、さらに、この技術は本県茶業経営の安定と発展に寄与したとして、平成十四年三重県民功労賞を授与された。横山の開発した防霜ファンは他に優る防霜技術として現在も茶業経営の安定に役立っている。

○庄山孝義（一九三〇～二〇〇九）

昭和五年、父の赴任先である桑名郡益生村で生まれ、三重県農林専門学校（現三重大学）を卒業後、京都府茶業研究所に二年間務めるが、昭和二六年、三重県から招聘を受け、以

来、三重県農業試験場茶業分場で三六年間茶業研究一筋、その間、昭和五四年～六〇年の八年間場長を勤めている。

庄山は、川俣谷茶の品質向上を技術面で支えたが、特に茶品評会出品茶の製造については昼夜を問わず指導に奔走し、今日の松阪茶の全国・関西茶品評会での上位入賞の礎を築いた。

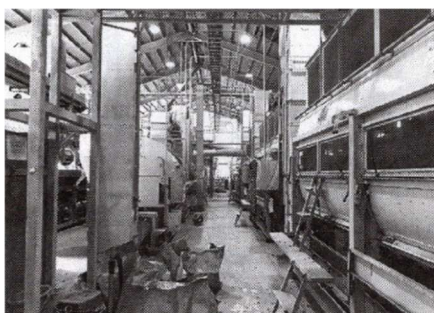
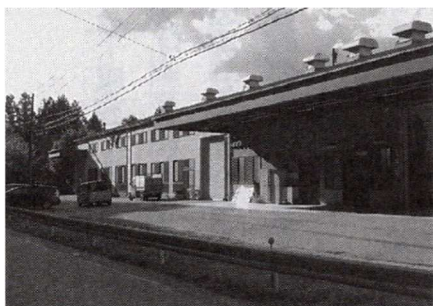
戦後の川俣谷地域（飯南・飯高）の茶園面積の推移（ha）

	昭和 40年	昭和 50年	昭和 60年	平成 7年	平成 17年	平成 25年
飯高町	40	75	143	141	1339	推定 1300
飯南町	74	136	185	188		
計	120	211	328	329	339	300

（農林統計）



防霜ファンと乗用型茶摘機



コンピューター制御の大型製茶工場

く川俣谷を一度訪ねてみようく見どころ一杯く

松阪から国道一六六号（和歌山街道）を車で二〇分程、大石不動を経て飯南町に入り櫛田川の流れを遡及して、白猪山の麓に広がる松阪牛の肥育や深野和紙で知られる飯南町深野、横野地区（旧柿野村）を通過し、仁柿川に架かる小さな橋を渡ると粥見地区に入る。直ぐの信号を右折すると仁柿峠を経て津市美杉町奥津を通って奈良、京都に通ずる。この道は古くは伊勢本街道で往来多く、沿道の村々は銘茶産地として知られていた。今では茶園は僅かしか見られない。さて、車は国道一六六号を直進し、山沿いのカープの多い道を上り詰めたところ、道の駅「茶倉駅」がある。江戸時代、丹生村の地土西村彦左衛門の尽力で出来たという立梅用水の頭首工（ダム）を眼下にみると、頭首工の傍にリバーサイド茶倉の施設がある。宿泊施設や茶業伝承館がありキャンプも楽しむこともできる。頭首工を左下に見ながらしばらく進むと急に視野が開け、一面、緑の良く管理された茶園の広がりに出合、つ。ここが粥見茶業の本場である。江戸後期に永田善次郎なる人物が宇治製茶法を伝えたと言う川俣谷で一番大きい茶産地でもある。沿道には伊勢茶の大きな看板が建ち、お茶の販売と喫茶の

店（茶来・深緑茶房）が目につく、ここで一服、深蒸し茶（松阪茶）を味わうのも良い。さらに櫛田川を遡ること一〇分、右に局ヶ岳の秀峰が現れ、左に道の駅「飯高駅」がある。道の駅は地元産物の直売所、レストランのほか、温泉「飯高の湯」が併設され、いつも賑わっている。帰りに温泉で疲れを癒そう。ちよつと直売所を覗いてみると地元産のお茶がところ狭ましと並び、さすがにお茶の産地を伺わせる。宮前は江戸時代には和歌山街道宿場町として栄え、堀内広域など多くの茶商（荷主）が活躍した場所でもあり、戦後の三重県茶業復興に尽力し野呂恭一の故郷でもある。また、映画監督小津安二郎が生涯一度だけ教師として教鞭をとった宮前小学校があり、飯高振興局前の信号の手前右に飯高町老人福祉センターの建物が見えるが、ここに野呂恭一の胸像が建ち、建物内に小津安二郎の資料館がある。

飯高「道の駅」を出て国道は川沿いに大きくカーブし、正面に栗木岳の剣美な姿が現れ、道の両側に茶園の広がりがある。飯高町の茶の中心地赤桶地区で道沿にお茶処「茶工房かほだ」の店がある。ここも覗いてみよう。お茶処を出て直ぐ、大楠で知られる水屋神社。樹齢千年に及ぶ大楠は天然記念物でもある。この宮前・赤桶地区は、珍布峠や礫石などの神話伝説、北畠具教卿の首塚、荒滝不動のつつじなど見どころが多くハイキングコースとなっている。赤桶を出てしばらく行くと三峰山の懷に抱かれた集落が点在する川俣地区に入る。この

川俣は鎌倉初期に京都高山寺の明恵上人が茶を伝え、また、紀州藩の茶処（番所）として栄えた江戸時代の川俣谷茶業の中心地であった、現在では茶園は僅かしか見られず、茶業の中心は下流の赤桶・宮前や粥見地区に移っているが、川俣地区の山中には当時を偲ばせる自生茶樹が多く見られ、江戸時代には山の中腹まで茶山が広がっていた名残りを留めている。

川俣地域に入り栗野橋を渡ったところの正面に旧川俣小学校の校舎が見える。この校舎の二階に大谷嘉兵衛翁資料館があり、翁の遺品、資料等が展示されている。ここから一〇分ほど行くと右側に三峰山登山道の看板をみる。この登山道への道を入ると、あまり知られていないが、三峰山中腹に栃の大樹がある。江戸時代飢餓に備え植えられたと聞かすが、今でも大きな実をつけ、地元の人たちが栃餅に使用しているとのことである。近くまで車道が付けられたので一度訪ねてみるのも良い。

また、ここから一〇分程で萌黄色の大谷橋を左に見て、最近、架橋された国道一六六バイパス「ひらせ大橋」を渡ったところが大谷嘉兵衛の生誕地宮本（江戸時代は谷野村）で、ここには大谷家の菩提寺長楽寺があり、平成一三年に建立された茶聖・大谷嘉兵衛翁の生誕の碑（胸像）が建つ。大谷嘉兵衛のことを知りたいなら、前述の大谷嘉兵衛資料館と併せて見学するとよい。長楽寺を出てすぐ左折し旧飯高町西中学校前から山中に延びる林道を車で一

五分程登ると、標高七〇〇メートルほどのところにお熊ヶ池がある。この池は中世北畠家が支配する谷野城にまつわる悲話が伝えられるが、嘉兵衛はこの池をこよなく愛し、生家の南の方向に位置することから自分の雅号を「南湖」としたと云われている。一度、足を延ばしてみるのも良い。

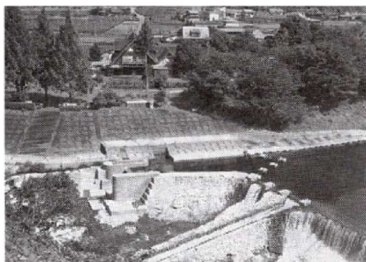
さて、長楽寺を後に中瀬橋を渡ると再び国道一六六号に交叉し、直ぐ左手に森地区（旧森村）に通ずる分岐に出合う。真つ直ぐ進むと波瀬集落を経て高見トンネルを抜け奈良県吉村に通ずるが、途中にもみじの名勝泰運寺や波瀬植物園、陶芸の森「虹の泉」、交流施設グリーンライフ「山林舎」があり、国道から離れ旧道（和歌山街道）入ると、波瀬本陣跡を始め、当時の街道の賑わいを偲ばせる。また、三峰山麓の月出集落から五キロほど林道を進むと国内最大級の中央構造線露頭（天然記念物）が見られる。

国道を直進せず左に曲がり新高橋を渡り森集落を蓮川に沿った道を辿ると蓮ダム湖に行き着く。この地域も今は殆ど茶園は見られないが、江戸時代の川俣谷茶産地の中心であった。なお、森地区は大谷嘉兵衛が横浜に出るときに頼った小倉藤兵衛の出身地でもあり、香肌峡温泉「スメール」がある。温泉でひと浴び、迫りくる山塊の趣を楽しむのも良い。

波瀬・森地域は櫛田川源流、北部台高山脈の懐深く、高見山、国見山、明神岳、迷岳、池

小屋山など一二〇〇〜一四〇〇メートル級の山々が連なり、明光風靡な山狭で登山のメツカでもある。

なお、川俣谷には伊勢国司北畠家の古城（碧）跡が点在し、古城めぐりも面白い。美味しい伊勢茶（松阪茶）を飲んで、川俣谷の遺跡と景観を訪ねるのも良い。一度、川俣谷探訪をお勧めしたい。



道の駅「茶倉駅」とリバーサイド
茶倉、手前は立梅用水頭首エ
(飯南町粥見)



茶販売と煎茶喫茶「茶来」(飯南町粥見)



茶販売と煎茶喫茶「深緑茶房」(飯南町粥見)



道の駅「飯高駅」と特産品直売所
(飯高町宮前)



戦後の川俣谷茶復興の立役者
野呂恭一の胸像 (飯高町宮前)



映画監督小津安二郎資料館
(飯高町宮前)



茶販売と煎茶喫茶「茶工房かほだ」
(飯高町作滝)



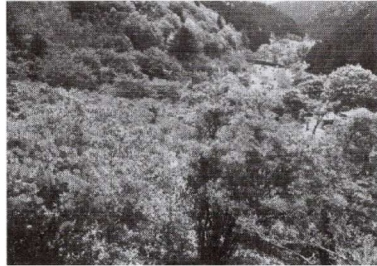
北畠具教卿首塚（飯高町宮前）



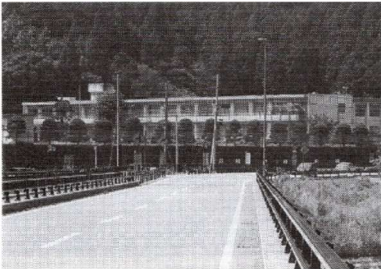
水屋神社の大楠（飯高町赤桶）



「珍布峠」と「礫石」
（飯高町宮前）



荒滝不動のつつじ
（飯高町赤桶）



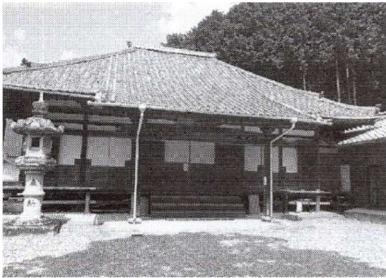
旧川俣小学校と大谷嘉兵衛翁資料館 2 棟（飯高町栗野）



三峰山中腹大桁の木



現在の大谷橋（四代目）



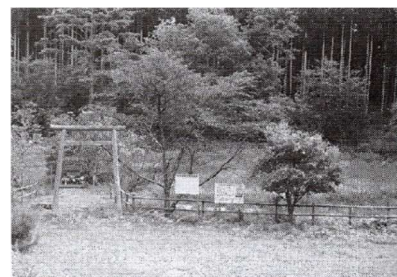
大谷家の菩提寺「長楽寺」
(飯高町宮本)



大谷嘉兵衛翁の顕彰碑（同）



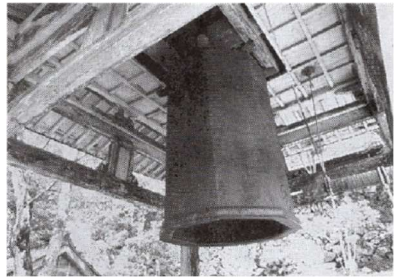
大谷家の墓(同)



嘉兵衛翁が愛したお熊ヶ池
(飯高町宮本 標高 700m)



中央構造線露頭（飯高町月出）



紅葉の名所泰運寺の八角梵鐘
（飯高町波瀬）



グリーンライフ
「山林舎」（同）

波瀬植物園（同）



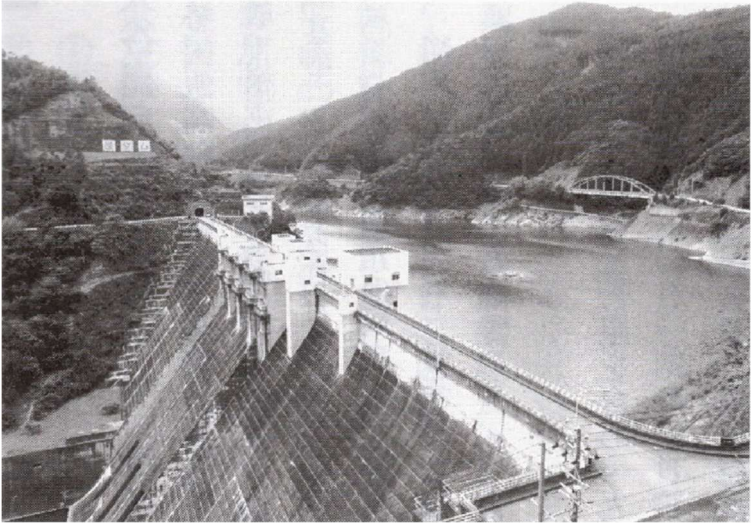
嘉兵衛翁が愛したお熊ヶ池
（飯高町宮本 標高 700m）



波瀬本陣跡と街道の風景
（同）



香肌峡温泉「スメール」
（飯高町森）



川俣谷源流域「蓮ダム湖」(飯高町森)



高見山の樹氷(飯高町波瀬)

○大谷嘉兵衛翁顕彰事業（胸像建立）の記録

伊勢国飯高郡谷野村（現松阪市飯高町宮本）出身で、文久二年（一八六二）一九歳で横浜に出て茶貿易で成功し、日本茶業発展に数々の業績を残し、没後、「茶聖」と称えられた大谷嘉兵衛翁の業績を顕彰しようと、平成一三年（二〇〇一）一月、地元の飯高町宮本を中心に「茶王・大谷嘉兵衛の会」を結成し、同年一〇月一四日、嘉兵衛の生誕地に顕彰碑（胸像）が建立された。

一、顕彰碑（胸像）の概要

(一) 作品

ブロンズ胸像（台座を含め一九〇cm）一基、台座及び業績碑一基

(二) 制作者

胸像…日展会員 稲垣克次氏（鈴鹿市在住）

台座一式…庭園業 林博巳氏（飯高町）



生誕地の碑…林寿一氏、林功氏、林博巳氏、三兄弟建造寄贈

(三) 建立地

三重県飯南郡飯高町宮本（翁の生誕地）長楽寺前谷野集会所敷地内

(四) 除幕式

平成一三年一〇月一四日（日曜日）

(五) 事業費九百万円

二、事業経過（飯高町産業課長片浦清吾氏の記録による。）

・平成一二年二月一日～四月二九日の期間において、三重県立図書館（津市）で大谷嘉兵衛資料展示が行われ、これを契機に生誕地に顕彰碑建立の話が持ち上がる。

・平成一三年三月六日飯高町役場

参加者 宮本町長、中村助役、山下教育長、村瀬議員、林議員、片浦産業課長、浅井、

高瀬会議所常務、木場宮本区長、中村、辻本

主な協議事項

- ① 全国お茶まつり（同年一〇月松阪市で開催）に合わせて、生誕地に顕彰碑を建立する。
- ② 事業内容、スケジュールなどの骨子を話し合う。

③ 顕彰碑建立の用地は地元で確保する。
・三月二三日飯高町役場

宮本町長、山下教育長、村瀬議員、林議員、片浦産業課長、堀井、高瀬常務、木場宮本区長、中村、辻本

主な協議事項

① 顕彰事業実施要領の検討。

② 財源確保の方法、見込み等

③ 顕彰碑建立候補地（大谷家の菩提寺長楽寺など）を調査

・四月一七日飯高町役場

茶聖・大谷嘉兵衛翁顕彰事業実行委員会設立総会

① 実施要領及び実行委員会規約の承認（別記・省略）

② 実施計画及び予算の承認（別記・省略）

③ 趣意書並びに協賛金募集方法について（別記・省略）

・四月二四日日展審査員稲垣克次氏アトリエ（菰野町）

高瀬、林、木場、中村、辻本、堀井、片浦、（アドバイザー原）

①胸像制作は鈴鹿市在住、日展会員稲垣克次氏に制作依頼

②台座等付帯工事、庭園業「香肌庭石」林博巳氏に依頼

・五月二七日～二八日

横浜の子孫、菩提寺、伊勢山公園（翁の銅像）、横浜商工会議所、大谷学園など、横浜・鎌倉の嘉兵衛翁ゆかりの地調査参加二四名

・五月吉日

茶聖・大谷嘉兵衛翁顕彰事業「生誕地の碑」建立協賛金依頼
（趣意書を県内茶業関係者に送付し協賛を依頼する。）

・六月八日飯高町役場

茶聖・大谷嘉兵衛翁顕彰事業実行委員会事務局会議

宮本町長、高瀬、村瀬、林、木場、中村、辻本、小林、堀井、片浦、（アドバイザー原）
準備の状況、今後のスケジュール等の調整を行なう。

＊胸像、台座等の制作進捗状況

胸像制作契約 茶業会議所が代行する。

台座制作契約実行委員会

＊趣意書の送付状況について

飯高町外で八〇〇通、一口一万円（一万円以上には記念品を贈る）

＊横浜（大谷家）の調査報告

＊今後の取組について

記念品タイピン 四〇〇個、ビンタックス一〇〇個、（単価 各一、六〇〇円）
レプリカ（三〇cm）個、（単価二万円）関係機関に贈呈

＊除幕式の準備

横笛（演出効果）新宮市の横笛奏者福井氏に依頼

野点煎茶道「三重静風会」に依頼

昼食 茶そば、茶粥、漬物を準備する。

・六月一六日 東京 日本茶業中央会に協力依頼（高瀬）

・六月二七日 煎茶道「三重静風会」現地調査打合せ（長楽寺）

三重静風会会員五名、高瀬、林、木場、中村、辻本、片浦

・六月二八日鈴鹿市在住稲垣克次氏アトリエ（菟野町）

胸像制作中間鑑賞会（胸像の最終制作段階での確認）

高瀬、林、木場、中村、辻本、小林、堀井、片浦、（アドバイザー原）

*NHK、朝日新聞、毎日新聞、伊勢新聞、中部読売新聞の取材を受ける。

・七月二三日東京全国茶生産団体連合会総会において協賛依頼（高瀬）

・七月二〇日県茶業会議所発行「茶情報」二〇一三七号」で顕彰事業紹介

・七月二五日東京日本茶業中央会総会において協力依頼（高瀬）

・七月三〇日飯高町役場

茶聖・大谷嘉兵衛翁顕彰事業実行委員会事務局会議

宮本町長、中村助役、高瀬、林、木場、辻本、小林、堀井、片浦、原口、浅井

*顕彰事業の進捗状況および予算の見直し

進捗は予定通り、総予算は六〇〇万円を八〇〇万円に増額

*協賛金の募集状況について

双除幕式並びに付帯行事のスキームについて

*今後のスケジュールについて

・八月二九日飯高町宮本谷野集会所

第二回実行委員会並びに関連事業調整会議

宮本委員長、村瀬、木場、仲森、森本、豊田、中尾、松倉、木下、川原、中森、西尾、中村、山下、林、村瀬、小林、辻本、高瀬、片浦、堀井以上委員二一名
煎茶道静風会（松井、大西）、手もみ茶保存会、町産業センター（上村）、役場（原口、浅井）、（アドバイザー原）計二七名

・顕彰事業の進捗状況について
*予算の変更について

二〇〇万円増額し、八〇〇万円とする。

*協賛金の募集状況について

八月二三日現在八〇七万五千円

*除幕式並びに関連行事の開催方法について 別記（省略）

*除幕式スケジュールについて

九月一〇日まで 招待状、案内状の発送

九月三〇日まで 感謝状（胸像、台座制作者）、記念品の調達、九月三〇日までに

リーフレット作成、協賛者名簿作成

一〇月一三日 除幕式設営、大谷嘉兵衛翁の遺品資料展示

一〇月一四日除幕式

・九月一〇日市町村関係協賛金依頼（飯南・勢和・多気・松阪・度会・大台・大宮・宮川の各市町村）

宮本委員長、村瀬副委員長、高瀬事務局担当理事の三人で回る

・九月二六日胸像・台座取付、園地完成

・九月二六日飯高町役場

実行委員会事務局会議事業の最終打合せ

宮本町長、高瀬、村瀬、木場、辻本、堀井、片浦、原口、（アドバイザー原）

・一〇月一四日茶聖・大谷嘉兵衛翁顕彰事業「胸像除幕式」式典（内容別記）

当日出席者・招待者九六名、茶王・大谷嘉兵衛の会四九名、煎茶道「静風会」関係者四二名、郷土の英雄仮装行列参加者六九名、黒滝獅子舞八名、一般約一〇九名

計（約）四〇〇名

三、事業収支決算書

- ・収入決算額 9,081,046 円
- ・支出決算額 9,081,046 円

1、収入の部

名称等	金額	名称等	金額 (円)
飯高町	2,000,000	県外 1 個人協賛金	10,000
三垣県茶業会議所	2,000,000	県内 21 団体協賛金	1,360,000
飯高町茶業組合	600,000	県内!07 企業・個人協賛金	1,445,000
茶王大谷嘉兵衛の会	500,000	大谷翁ゆかりの方祝儀	260,000
県内 8 市町村協賛金	360,000	胸像レプリカ販売 (6 個)	126,000
県外 17 団体協賛金	420,000	預金利息	46
合計			9,081,046

2、支出の部

名称等	金額 (円)	名称等	金額 (円)
1. 胸像制作・除幕費	6,281,475	5.印刷費	480,150
胸像制作代	3,150,000	6.役務費	110,855
台座・園地整備費用	2,823,975	7.記念品代	1,038,975
除幕費用	3,075,500		
2. 献茶・茶席費	212,132	8.設備費	79,350
3. 消軽品費	151,520	9.その他経費	502,599
4. 食糧費	223,990	合計	9,081,046

茶聖・大谷嘉兵衛翁顕彰事業実行委員会構成名簿

・委員長 宮本里美（飯高町長）

・副委員長 中嶋正（県茶業会議所会頭・県茶商工協同組合理事長） 村瀬登（飯高町茶業組

合長） 木場嘉生（茶王・大谷嘉兵衛の会会長）

・委員 後藤博英（県農林水産商工部農芸畜産課長） 仲森孝（全農三重県本部運営委員会

会長） 森本直樹（松阪農業協同組合長） 豊田一之（水沢茶農業協同組合長） 仲野

範夫（龜山茶農業協同組合長） 井口信之（四日市茶業連合会長） 本郷純生（鈴鹿

市茶業組合長） 中尾利光（龜山市茶業組合長） 松倉源（飯南町茶業組合長） 木下

辰美（大台町茶業組合長） 川原平生（勢和村茶業組合長） 中森慰（度会町茶業組

合長） 西尾守（県茶業青年団長） 羽田敏明（県茶生産青年会長） 中村正則（飯高

町助役） 山下泰史（飯高町教育委員会教育長） 林博巳（飯高町議会産業建設常任

委員長） 村瀬正治郎（飯高町茶業組合副組合長） 小林典子（飯高町文化財調査

員） 中村恭也（茶王・大谷嘉兵衛の会会員） 辻本恵計（茶王・大谷嘉兵衛の会副

会長）

・事務局委員 高瀬孝二（県茶業会議所常務理事） 片浦清吾（飯高町産業課長） 堀井宏（茶

王・大谷嘉兵衛の会事務局局長）

大谷嘉兵衛翁（一八四四～一九三三）略歴

- ・ 弘化元年（一八四四）伊勢国飯高郡川俣村谷野（現三重県松阪市飯高町字宮本）に生まれる。
- ・ 八歳のとき、長楽寺の住職に読み書きそろばんを習い、家事を手伝いながら読書などで独学を続ける。
- ・ 文久二年（一八六二）三月一九歳のとき隣村森村出身の横浜で製茶問屋を営む「伊勢屋藤兵衛」に奉公し、のち藤兵衛の養子となるが藤兵衛と意見が合わず、慶応三年（一八六六）スミスベーカー商会の製茶買入れ人となり、大阪において三ヶ月間で七〇万斤の製茶を買入れ茶貿易界の新記録となる。
- ・ 明治元年（一八六八）に独立し、横浜海岸通りに製茶売込商「大谷」を開業、横浜最大の製茶売込商となる。
- ・ 茶の輸出量が増加するに伴い粗悪製品が横行し、この改善策として明治五年（一八七二）同業者有志と計らい製茶改良会社を設立し、明治十一年（一八七八）茶貿易の基礎を強固にするため茶商協同組合を創設する。
- ・ 茶の粗製濫造を防止し品質向上を図るため、明治十二年（一八七九）第一回製茶共進会を

横浜で、明治十六年（一八八三）第二回製茶共進会を神戸で開催する。

・明治十六年（一八八三）全国の有志と計り全国茶業集会を開催し、政府に茶業組合取締の制定を建議し、翌十七年（一八八三）茶業組合準則の発令となる。この準則に基づいて、これらを統括する中央本部を同年五月東京に設置する。（我が国の茶業組合組織の全国統一の基礎となる）

・明治二十四年（一八九一）四八歳で茶業組合中央会議所会頭（現日本茶業中央会）に就任、昭和二年（一九二七）までの三六年間、我が国茶業界の陣頭に立つ。

・明治三二年（一八九九）米国フィラデルフィア万国商業大会に日本代表として列席を機会にアメリカ合衆国大統領マッキンレーに面会し、日本茶関税の廃止を求めアメリカにおける茶税廃止法制定を実現させる。また、太平洋海底電線設置を建議しアメリカ合衆国中央政府に陳情し、その結果、太平洋商業電線会社が設立され通信史上の一新紀元を画する。

・明治四〇年（一九〇七）〜大正十四年（一九二五）まで貴族議員、明治四〇年（一九〇九）勲三等瑞宝章、大正四年（一九一五）正五位、大正十二年（一九二三）紺綬褒章など、数々の賞を授与される。

・昭和八年（一九三三）二月、八九歳で生涯を閉じる。没後、翁の功績を称え「茶聖・大谷

嘉兵衛翁」と呼ばれている。

＊以上、中央での輝かしい活躍で郷土への貢献は語られていないが、伊勢茶の買入れを優先的に行い、三重県を茶の大産地に育てたほか、地元の大谷橋架橋、川俣小学校建築支援、大口港（松阪港）築港支援など、郷土への思いは特に強かったと云われている。

＊大谷嘉兵衛翁の顕彰碑は大正六年（一九一七）静岡県清水公園内、昭和六年（一九三一）横浜市伊勢山大神宮境内に建立され、地元三重でも平成十三年（二〇〇一）に翁の生誕地、松阪市飯高町宮本の大谷家の菩提寺長楽寺の隣接地に生誕地の碑（胸像）を建立されている。



除幕式（胸像除幕）



除幕式に華を添える



郷土英傑仮装行列

○三重縣飯高飯野郡茶業組合規約（明治廿七年三月改正）

第一章 総則

第一條 凡ソ茶業ニ従事スルモノ八明治二十年農商務省令第四號茶業組合規則ヲ遵守シ此れ

茲ニ定ムル所ノ組合規約ニ同盟スルモノトス

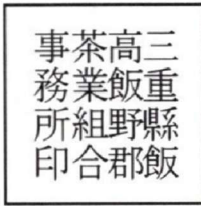
第二條 當組合ハ三重縣飯高飯野茶業組合ト稱スル

第三條 當組合員ハ縣下茶業組合聯合會議所規約ヲ遵守スルモノトスル

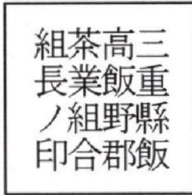
第二章 組合の位置

第四條 當組合事務所ハ組長ノ所在地ニ設置ス

第五條 組合事務所及組長ノ用フル印影左ノ如シ



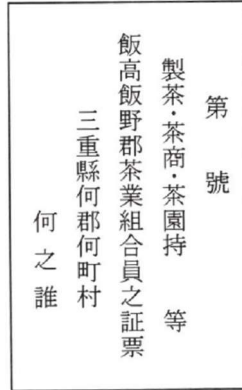
分二寸一方



分 六方

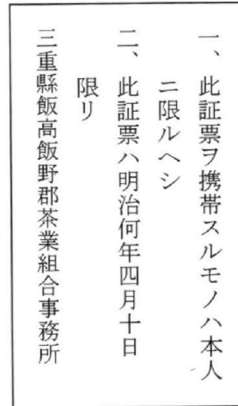
第三章 組員ノ證票

第六條 組合員ノ携帶スル證票雛形左ノ如シ



縦三寸二分

横 分二寸二分



縦 分三寸二部

横 分二寸二分

第七條 前條ノ證票ヲ左ノ項目ニ分ツ

一、茶商人

二、製茶人

三、生葉販売人

但シ兼業スルモノハ各項目一一依リ證票を受クルモノトス

第八條 社名若クハ組合ヲ以テ茶業ニスルモノオノ八会社八社長ノ名義ヲ以テシ組合八總代人

ノ名ヲ以テ相當スル證票ヲ受ルモノトス

第九條 前條ニ掲ケタル項目八毎年二月二十五日迄ニ當業者ヨリ組合事務所へ申出相當

ノ證票ヲ受クルモノトス

第十條 水火盜難又ハ其他ノ事故ニテ証票遺失シタルトキハ其顛末ヲ詳記シ組合事務所へ申

出再渡ヲ乞フヘシ

但前年ノ証票還納ノ節ニ紛失シタルトキモ又本條ノ手續ヲナスモノナリ

第四章 粗悪不正茶取締方法

第十一條 組長委員視察掛ニ於テ左ノ諸項目ヲ執行スル場合ニ於テハ之ヲ拒ムヲ得ス

一 違約茶隱蔽ノ疑アルトキ製茶及家宅倉庫其他諸種ノ容器調査ノ事

但シ本項ノ場合ニハ組長又ハ委員立會ノ上ニアラサレハ施行スヘカラス

一 禁止茶若クハ禁止茶ノ嫌疑アリテ見本ヲ取り製茶全体ニ封印シ其物品ヲ差押フ

ル事

一 濕氣ヲ含ミタル製茶ヲ販賣スル者又同シ

一 前項ノ場合ニ於テハ無關係ナルモノヲシテ保管セシムル事

第五章 役員選舉

第十二條 當組合ハ委員七名ヲ置キ組合中ヨリ資産名望アリ篤實ニシテ茶業ニ熱心ナルモノヲ選出スルモノトス

但シ組長ハ委員ノ互選ヲ以テ之ヲ定ム

第十三條 當組合役員左ノ如シ

一 組長 一人

一 委員 六人

第十四條 當組合ハ組長ノ特撰ニ因リ視察掛若干名書記一名ヲ置キ組長ノ指揮ニ從ヒ職務

ニ從事セス

第十五條 組長及委員ノ任期ハ滿二ケ年トシ滿期再撰スルヲ得

第六章 入退者取扱方法

第十六條 當組合へ加入セント欲スルモノハ第六條ノ項目一ヨリ該年度ノ証票料相添其旨

書面ヲ以テ組合事務所へ申出相當ノ証票ヲ受クルトス

第十七條 事故ニヨリ組合ヲ退カント欲スルモノハ其旨ヲ詳記シタル書面ヲ添へ組合事務所へ申出証票ヲ還納スルモノトス

第七章 違約者處分方法

第十八條 第十一條ノ一項二項三項ニ示ス所ノ執行ヲ拒ムモノハ金窶圓以上參圓以下ノ違

約金ヲ出サシメルモノトス

第十九條 第二十四條ニ違背セシムルモノハ違約料トシテ荷物一個ニ付金貳拾五錢ヲ出サ

シムルモノトス

第二十條 第八條第九條ニ違背セシモノハ金拾錢以上金五拾錢以下ノ違約料ヲ出サシムル

モノトス

第八章 經費賦課徴収支出方法

第二十一條 當組合員ノ負擔スル經費ノ目左ノ如シ

一 中央會議所及聯合會議所經費

一 組長委員手當金書記給料及旅費

一 視察掛年手當及日當旅費

一 小使給料

一 事務所借家賃

一 印刷費

一郵便電信諸費

一組合會費

一製茶傳習所費

一談話會費

一所費

第二十二條 前條ノ經費ハ左ノ項目ニヨリ賦課ス

一證票料

一印證料

第二十三條 違約料ハ翌年度ノ經費に充ツルモノトス

第二十四條 第二十一條經費豫算及第二十二條ノ賦課額ハ組合會ノ議決に據ル

第九章 會議

第二十五條 撰當組合會ヲ定式會臨時會ノ二種トス定式會ハ二日間臨時會ハ一日トス

但シ時宜ニヨリ會議ヲ伸縮スルヲアルヘシ

第二十六條 定式會ハ毎年三月中ニ開會シ組合經費收支豫算及規約更正其他組合ニ關スル必

要ノ事件ヲ議定スルモノトス

第二十七條 臨時會ハ組長委員ニ於テ開會ヲ要スルト認ムルトキ若クハ議員三分ノ一以上請

求スルトキハ之ヲ開クモノナリ

第二十八條 組合會議員八左ノ項ヲ以テ組合員中ヨリ互撰シ之二充ツ

一 町村當業者五十人以上百五十人以下一人。三百人以下二人。四百五十人以上。四百五十人以上四人。

但シ五十人以下ノ町村ハ最寄町村ト合併シテ本項ノ定則ニヨル

一 飯高郡松坂町ニハ本項ノ外別ニ組合會議員一名ヲ撰出ス

第二十九條 組合會議員ノ任期ハ滿四ケ年トス滿期再撰スルヲアルヘシ

但シ委員兼スルヲ得ス

第十章 雜則

第三十條 茶荷物ニ貼付スル印證ハ一個ノ荷物製茶正量老貫目以上ヨリ一個毎ニ貼付スル

モノトスル

第三十一條 前條ノ印證八便宜ノ地ニ取次所ヲ設ケ同所ニ配布シ置クモノトス

但シ取次所八標札ヲ揭示スヘシ

第三十二條 茶園ノ耕耘培養八其期節ヲ誤ラサル様注意シ若シ虫害等ノ兆候アルトキハ迅速

豫防ノ手當ヲ加ヘ其景況ヲ組長ヘ報告スヘシ

第三十三條 茶樹ノ摘葉ハ必ス季節ヲ過タサル様注意シ良品ヲ得ルヲ目的トス

第三十四條 製茶ハ必ス十分ノ練火ヲナシ貯蔵スルトキハ壺又ハ渋引ノ張箱ヲ用ヒ紙袋又ハ粗造ノ箱ハ決シテ用ユヘカラス

第三十五條 當組合員ニシテ他ノ組合ニ至リ茶業ヲ営マントスルトキハ該地組合ノ規約ヲ遵守スヘシ若シ背クモノアリテ該地ノ事務所ヨリ報告アルトキハ當組合ノ規約ヨリ相當ノ處分ヲ為スヘシ

第三十六條 他府縣若クハ他組合ノ者當組合ニ来リ其業ヲ営ム者ハ總テ此規約ヲ遵守スルニアラサレバ賣買取引ヲナスヘカラス

第三十七條 當組合會計年度ハ毎年三月ニ起リ翌年二月ニ終ルモノトス

第三十八條 金銭出納簿冊ハ組合員閱覽ヲ請フトキハ速ニ其請求ニ應スヘシ

第三十九條 毎年三月組長ヨリ前々年度經費ノ決算ヲ組合員ニ報告スルモノトス

第四十條 組長退職又ハ辭職ノ場合ハ組合委員中へ報告シ委員八速ニ補擲撰擧ヲ行フ

へシ

第四十一條 組合役員任期改撰ノトキハ新任撰挙及び事務取扱ハ後任者確定迄総テ本舊役員

ニ於テ擲任スルモノトス

第四十二條 此規約ハ組合會ノ決議ニヨリ縣廳ノ許可ヲ経テ変更スルヲ得

(著者補筆)

茶業組合の設立は、本県の駒田作五郎の建議と大谷嘉兵衛の尽力が政府を動かし、明治十七年、農商務省令を以て「茶業組合準則」の発令となり、府県単位に茶業取締所、郡単位に茶業組合が設立された。

なお、明治二十年には、府県単位に設立した茶業取締所を茶業聯合会議所に改組し、府県の茶業聯合会議所を束ねる茶業組合中央会議所（現日本茶業中央会）を東京に設立した。

○三重県生まれの幻の手もみ製茶法「片手葉揃揉み」の再現

小誌「七、粥見村茶業の勃興」の項で永田善次郎が山城国宇治湯屋谷村の永谷武右衛門に師事し宇治製茶法を川俣谷に伝えた」と記述したが、この製茶法は元文三年（一七三八）山城国宇治湯屋谷村永谷宗圓が編み出した手もみ製茶法で、この方法は茶葉を蒸し、下から熱を加えた焙炉（ほいろ）という手もみ台で茶葉を揉み、細長く針状の茶に仕上げるもので、現在の緑茶製法の基礎をなすものである。

永谷宗圓が編み出した手もみ製茶法は、各地に普及する中で、茶師達の手で工夫改良が加えられ、独自の技法を確立し、その技法を特色とする手もみ茶流派の誕生をみた。静岡県茶業史（大正一五年二月発刊）には、明治元年伊勢の岩吉なる人物が「片手葉揃揉み」の手法を静岡県に伝えたとする記述があり、この記述を引用する文献は、静岡県茶産地（牧之原開拓史考）、藤枝茶業覚え、三重県茶業史などがある。

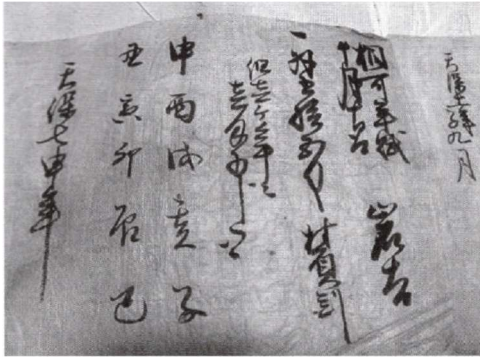
この「片手葉揃揉み」なる製茶法とは如何なるものか。謎となっていたが、二十年程前、静岡県藤枝市在住で手もみ茶製法における静岡県無形文化財保持者の青木勝雄氏が三重県か

ら伝えられた「片手葉揃揉み」であると先代から教えられたとする技法が、度会町の中森慰氏が以前（昭和四十五年頃）分家の祖母から教えられていたものと全く同じであることから、祖母から伝授された手もみ技法は、明治初年に伊勢の岩吉が静岡に伝えた「片手葉揃揉み」であることを確信するに至った。平成九年三重県手もみ茶伝承保存会が設立され、会長に推挙された中森氏は、早速この技法を会員に指導し、三重県生まれの手もみ茶技法「片手葉揃揉み」の伝承保存に取り組んでいる。

この技法は、手もみ茶の仕上げ工程において、焙炉（手もみ台）の助炭面（揉み面）に片手を斜め方向に置き、片手で助炭面の茶葉を拾い、斜めに置いた手のひら上で茶葉を回転させながら茶の形状を整えて行く方法で、永谷宗圓が考案した宇治製茶法の揉み切り法に比べ、能率的で揉み手の負荷も軽く済むことから南伊勢地方で広く普及した。

当時（明治初期）静岡県では五千町歩にも及ぶと云われる牧之原台地に茶園造成が進み、三重県から多くの茶業技術者が静岡に派遣された時代で「片手葉揃揉み」も静岡県に伝授されたと考えるが、静岡県には、宇治製茶法（揉み切り技法）と伊勢片手葉揃揉みの技法が同時に伝わり、これらの技法にさらに工夫改良が加え、轉練揉み、こくりなどの技法が編み出し、その技法を特技とする多くの手もみ製茶の流派が誕生した。

この様子について、静岡県茶業史の記述から次の様に推察を試みた。
 なお、片手葉揃揉みを編み出し、静岡県に伝えたという伊勢の岩吉なる人物については、前述の中森慰氏に、その技法を教えた中森氏の分家は江戸時代から製茶業を営み、中森慰氏の仏壇から岩吉署名の書付が見付かり、また、近くの国東山（国東寺跡）参道にも中森岩吉の名が刻まれた丁石が見られることから推察して、岩吉は中森家に縁のある人物であると確信している。



度会町大久保中森慰氏の仏壇から発見された
 岩吉署名の書付



国東山（国東寺跡）の参道にある丁石、
 天保15年大久保村中森岩吉の文字が刻まれている

(一) 静岡県茶業史 (大正一五年二月発刊) 抜粹

第四章 緑茶製造法の沿革

第二節 明治以降

一、揉切製時代 (自明治元年至同九年)

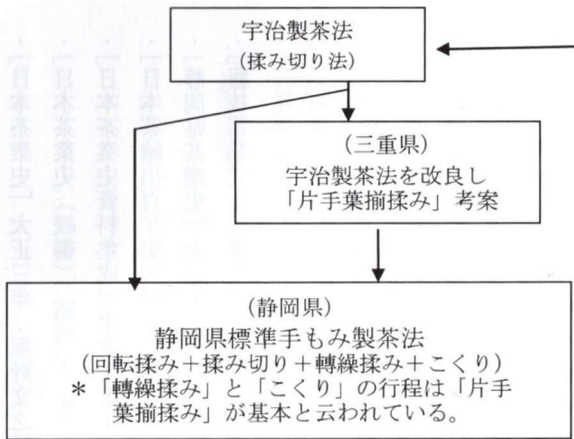
明治元年伊勢より姓不詳岩吉と云へる者本縣に來れり。同人葉揃揉に精巧なりしかば、志太郡岡部町の芝田作太郎氏は其手使ひ方法を基礎として「片コクリ」の製法を行ひ、是傳へんが為め、洽く同郡内に傳習所を開けり、轉練製は之れを基準として考案せられたるものなりとの説あり。

二、改良著手時代 (自明治十七年至同二十二年)

明治十六年三重縣より酒井甚四郎氏を聘して栽培の改良を計り、尚酒井氏の紹介によりて、三重縣製茶技師小俣善助氏を聘し、静岡傳習所、城東郡布引原丸尾文六氏、濱名郡三方原百里園等に於て製茶傳習所を開設して進歩せる三重縣の製茶法を傳へたり、其後各地方の有志者相計り、三重縣より教師を聘してその傳習を受くるもの多し。

(二) 手もみ茶製法の改良と伝播の概図 (文献からの推察)

○元文三年 (一七三辛) 山城国湯屋谷村永谷宗圖が編み出した手も



— 参考 —

静岡県では宇治製茶法 (揉み切り法) と伊勢片手葉揃揉みを基本としてさらに工夫改良を加え種々の特技とする「手もみ製茶流派」が続々と誕生した。明治時代の静岡県における手もみ製茶流派は二十一を記録されているが、伊勢片手葉揃揉みを基本とするものは五流派確認できる。

- ・ 片手葉揃揉み — 轉繰揉み北倉開流・川上流・開進流・鳳明流・奥津流
 - ・ 宇治揉み切り — 青透流・教開流・小笠揉み切り流・今村流・開頭流
 - ・ その他北青澄流・田村流・誘進流・天下一製法
- *この項の記述は、静岡県茶業史の記述から著者が考察を加えたものであり、間違っているところもあると思うので、あくまでも参考に留めおかれたい。

主な参考文献

- ・「日本茶業史」大正三年塚野文之輔著茶業組合中央会議所
- ・「日本茶業史（統編）」昭和十一年茶業組合中央会議所
- ・「日本茶業史資料集成」平成十五年寺本益英編集横浜茶業誌
- ・「日本茶輸出百年史」昭和三十四年日本茶輸出百年史編纂委員会編日本茶輸出組合
- ・「静岡県茶業史」大正十五年静岡県茶業聯合会議所
- ・「藤枝茶業覚え」平成八年藤枝茶振興協議会
- ・「三重県史（資料編、近代三産業・経済）」平成元年三重県編集
- ・「三重県史」（近代三資料・統計）」平成元年三重県編集
- ・「三重の茶業」大正九年三重県茶業組合聯合会議所
- ・「三重県茶業概観」昭和二十五年三重県農林部農務課
- ・「三重県茶業概観」昭和三十九年三重県農林水産部
- ・「三重県茶業会議所創立三十年記念誌」平成二年三重県茶業会議所
- ・「三重県茶業年統計」昭和四十四年農林省経済局調査部、昭和五十年農林水産省統計調査部

- ・「松阪市史」「飯南町史」「飯高町郷土誌」「相可町史」「勢和村史」「多気町史」
- ・「四日市港開港百年史」平成十一年 四日市港管理組合
- ・「伊勢茶の経済的研究」昭和三十一年中野清作・松田延一共著 農林省農業総合研究所
- ・「大谷嘉兵衛翁伝」昭和六年大谷嘉兵衛翁頌徳会
- ・大谷嘉兵衛翁伝抄録編 平成八年 大谷剛正著
- ・「竹川竹斎翁」大正四年三重県飯南郡教育会
- ・「日本農書全集（特産「蚕茶並ヒニ紙木植方書竹川竹斎編）」
平成九年上野利三著 農山漁村文化協会
- ・「江戸時代における茶の生産と流通に関する一考察」平成十一年 畠清次
- ・「中世にさかのぼる伊勢茶の生産と流通」平成十五年 畠清次
- ・「圓光寺六百年史」平成十六年 坂倉賢芳著
- ・「松阪商人のすべて―（江戸進出期の様相）」平成十七年 大喜多甫文著
- ・「神宮御師資料」昭和五十五年 皇學館大学史料編纂所
- ・「新聞記事」夕刊三重新聞社ほか

「著者略歴」

高瀬孝二

- ・昭和11年（1936） 三重県飯南郡飯南町の茶農家に生まれる。
 - ・昭和33年（1958） 三重県庁農林水産部に就職
 - ・平成9年（1997） 三重県農業技術センター首席研究員
兼茶業センター場長を最後に定年退職
 - ・平成9年（1997） 三重県農業後継者育成基金事務局長に就任
 - ・平成11年（1999） 三重県茶業会議所常務理事に就任
 - ・平成20年（2008） 同上 退任
- 現：日本茶インストラクター協会認証 日本茶インストラクターリーダー
同 日本茶アドバイザー養成講座専任講師
- 主な著書 三重県茶業史（編）

伊勢茶発祥の地
川俣谷のお茶

平成28年2月15日発刊

編著 高瀬孝二
三重県松阪市大黒田町1850-5

発刊者 同

印刷所 伊藤印刷株式会社
三重県津市大門32-13
電話 059-226-2545（代）
